

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 基礎篇第二十課 さくらが きれいだそうです： 伝聞・様態の表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002799">https://doi.org/10.15084/00002799</a>

日本語教育映画解説20

基礎篇第二十課

さくらが きれいだそうです

——伝聞・様態の表現——

国 立 国 語 研 究 所

## 前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするもので、全30課を予定している。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにすることを願っている。

この第二十課「さくらが きれいだそうです」の解説は、日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室が企画・編集し、執筆にあたったものは、次のとおりである。

本文執筆 佐久間勝彦（企画協議会委員・東京外国语大学講師）

資料1., 2. 日向茂男（日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室）

昭和58年3月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

## 目 次

1.はじめに.....	1
2.この映画の目的・内容・構成.....	2
2.1.目的・内容.....	2
2.2.構成——場面を中心として.....	4
2.2.1.解説書における場面,表現の扱い.....	4
2.2.2.映画の場面,表現形式.....	5
3.この映画の学習項目のまとめ.....	42
3.1.国文法における「様態表現」の取り扱い.....	43
3.2.日本語教育における「様態表現」の取り扱い.....	50
3.3.伝聞の「そうだ」,様態の「そうだ」,推定(不確かな断定) の「ようだ」,「らしい」の意味・用法について.....	55
3.3.1.伝聞「そうだ」.....	55
3.3.2.様態「そうだ」.....	57
3.3.3.推定(不確かな断定)「ようだ」.....	58
3.3.4.推定(不確かな断定)「らしい」.....	60
4.参考文献.....	63
資料1.使用語彙一覧.....	65
資料2.シナリオ全文.....	85

## 1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩の日本語学習期における視聴覚教材として企画・制作されたもので、この映画「さくらが きれいだそうです」は、その第二十課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等にあたったものは、次の通りである。

昭和55年度上期 日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

石田 敏子 国際基督教大学専任助手

木村 宗男 早稲田大学語学教育研究所教授

窪田 富男 東京外国語大学教授

斎藤 修一 慶應義塾大学国際センター助教授

国立国語研究所日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

野元 菊雄 日本語教育センター長

武田 祈 日本語教育センター日本語教育教材開発室長

日向 茂男 " 日本語教育教材開発室研究員

清田 潤 " 技官

川瀬 生郎 " 日本語教育研修室長

この映画「さくらが きれいだそうです」は、日向茂男、清田潤の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり、また同氏はこの映画の演出も担当した。ただし演出の際の言語上の問題については、協議会委員及び日本語教育センター関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育教材開発室の日向茂男が全体企画・編集を行い、

執筆には佐久間勝彦委員があたった。また資料1.、資料2.は、日向茂男が担当した。全体の企画、また執筆にあたっては、この映画の企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお、この映画は、そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

## 2. この映画の目的・内容・構成

### 2.1. 目的・内容

この映画「さくらが きれいだそうです」の主要な目的は、そのサブ・タイトルが示すとおり、助動詞「そうだ」による「伝聞・様態の表現」を提示し、その基本的な意味・用法の理解をはかることである。そのうち「様態表現」については、「推定（不確かな断定）の表現」との関連であいまいなところが少なくないので、後に「この映画の学習項目のまとめ」のところで詳しく扱うこととする。

学習内容として映画の中に現れる主な表現形式は、「推定（不確かな断

定) の表現」を含めて、以下の 4 つに大別される。

- (1) 伝聞の助動詞「そうだ」
- (2) 様態の助動詞「そうだ」
- (3) 推定（不確かな断定）の助動詞「ようだ」・「らしい」
- (4) 疑問の終助詞「かしら」

この映画を補助教材として使う場合、すなわち別の教科書を使用しつつ「伝聞」「様態」「推定」などの文型を指導する際に、参考もしくは確認として補助的に利用する場合には問題はないが、映画を主教材として第一課から順を追っていく体系的な指導を行う場合には、類似した表現形式の提出方法をめぐって教授法上立場が分かれよう。

ごく大まかにいえば、1)類似した表現形式はなるべくまとめて整理して提出し、その意味・用法上の相違などを対比させながら理解させていくのが効果的だとする立場と、2)類似した表現形式はまとめて提出せず、より基本的なものだけを先に教え、その後少しづつ類似した表現形式を与えていくのが効果的だとする立場となるだろう。

この映画が前者の立場をとっていることは明らかだが、類似した表現形式をまとめて（同じ課で）扱う場合に留意すべきことは、類似してはいても意味・用法の異なる表現形式の差異が十分明確になるような文脈を与え、学習者の理解をはかることである。すなわち、ある表現形式 A が自然に使えて、それと類似した別の表現形式 A' が誤用もしくは不適切になるような用例を、十分な数だけ用意する必要がある。とくに初級段階において、A, A' いずれもが自然に使える用例を材料にして、A, A' の意味・用法上の相違を効果的に指導するというのは、無理があるばかりでなく学習者に不必要的負担を強いることにもなる。

こうした観点から、この映画のせりふ（用例）を、指導すべき表現形式との関連において検討していくと、必ずしもすべてが満足すべきものではないことがわかるが、そこは、教室で指導にあたる教師が、自分に与えられた学

習者に最も効果的だと思われる例文等を用意することによって補いつつ、より有効な利用方法を模索していくよりほかなかろう。

また、この種の類似した表現形式の指導は、それを含む例文等を、十分な準備なしに教室で思いつくまま板書したりしていくと、ただ学習者を混乱させるだけの不本意な授業に終わることも少なくない。したがって、教師は、教室で教える際に「伝聞」「様態」「推定」などの文法用語を使う必要はないが、教材研究、教育内容の研究の一環として、指導内容となる表現形式についての先行研究に十分あたり、それぞれの意味・用法上の特徴、相互関係や相違点についての理解を深め、例文や練習問題ひとつを作るにも細心の注意を払うことが望まれる。「この映画の学習項目のまとめ」の終わりに示した参考文献などが役に立つと思われる。

なお、後者の立場すなわち類似した表現形式をまとめて提出しない考え方について簡単に触れておく。これは、初級段階においては応用範囲の広い最も基本的な表現形式を厳選して与え、正しく使うことのできる少数の表現形式をまず身につけさせ、次に理解面すなわち聴解力や読解力を高めるために、既習の表現形式のバラエティーとして、類似した表現形式を少しづつ与えていくのが効果的だと考える立場である。

いずれの立場も、机上の議論だけではどうにもならず、学習目的別、学習段階別、学習者の母語別など、それぞれについての各種の検討をふまえた、実践的な研究が望まれるところである。

## 2.2. 構成——場面を中心として

### 2.2.1. 解説書における場面、表現の扱い

本解説書では、映画の場面や言語表現を以下の通り扱うこととする。

1. この映画は、場面によって全体を大きく二分することができるので、それぞれの場面を、Ⅰ、Ⅱとする。そしてそれを、映画のストーリーの流れにしたがって、便宜上さらに小さく分けるが、それぞれの小場面をⅠ—1、Ⅰ—2、Ⅰ—3……のように示すこととする。

2. 言語表現については、文単位で①, ②……のように通し番号をつける。  
この文番号は、使用語彙一覧で引用される文やシナリオ全文で用いられるものと共通である。文を変形して示すときには、①', ②'……のように'印をつけ、変形して示す文が二つ以上ある場合には、'', ''のように'を重ねていく。
3. この映画の中に直接現れていない文や表現を例示するときには、[1], [2]……のように [ ] 付きの番号を付け、それを変形して示すときには上記 2 の場合同様'印をつける。

### 2.2.2. 映画の場面、表現形式

すでに述べた通り、この映画は大きく二つの場面に分けることができるが、以下それぞれの場面について、その内容および主な登場人物を確認しておく。

#### 場面 I 大きな駅の前で (①～⑤2)

おばあさんと少女(実は孫娘)がだれかを待っている。約束の時刻はとうに過ぎているらしいのだが、正確な時間が分からぬ。そこで二人は、やはりだれかを待っているらしい一人の女性に時刻を尋ねる。親切なその女性は、困っている二人に代わって 104 番(番号案内)に電話して、待ち合わせた知り合いの電話番号を調べるが分からず、結局、おばあさんと孫娘は目的地の公園へ先に行くことにしてその女性と別れるのだが、ここで二人はあわてて女性のバスケット(映画のせりふでは「かご」)を取り違えてしまう。女性は、二人がタクシーで去った直後、それに気付き急いで二人の後を追う。

#### 場面 II 公園で (⑤3～⑤7)

女性は、公園の正門でタクシーを降り、係員にバスケットを持った二人の行方を尋ね、教えられた方向へ急ぐ。一方、公園内の休憩所で串団子を食べながら、ひと休みしていたおばあさんと孫娘も、バスケットの中から子ねこが現れたことから、自分たちの間違いに気付く。驚いた二人は急いで正門へ向かうが、途中で無事その女性に会うことができ、一件落着。

したがって、主な(せりふのある)登場人物は、場面 I, II を通して、お

ばあさん、その孫娘、女性、場面Ⅱでは、公園正門の係員、休憩所のウェーテレスの計5人である。

場面Ⅰの「大きな駅」というのは新宿駅で、場面Ⅱの「公園」というのは新宿御苑なのだが、ここでそれぞれについて触れておく。

新宿駅は日本一大きい駅といってよい。それは、新宿駅がターミナル駅として1日140万人という日本一の乗降客数を誇り、乗り換え客を含めると1日の利用者数が200万人にも達するからである。

駅の西側には、“新宿新都心”と呼ばれる地域が広がり、住友ビル(52階)、三井ビル(55階)、京王プラザホテル(47階)、新宿センタービル(54階)などの超高層ビルが立ち並んでいる。

駅の東側には、大繁華街が広がり、若者のエネルギーを吸収し燃焼させるマンモス・プレイタウンを形成し、東京の盛り場の一大中心地となっている。長期化する不況の中で、盛り場も静かになったといわれる昨今であるが、それでもこの新宿駅周辺は六本木とならんで連日深夜過ぎまで賑っている。とくに歌舞伎町界隈では、平日の午前2時3時になっても客を待つタクシーが大通りに溢れ、交通が渋滞するほどである。

この活気に満ちたマンモスタウン新宿は、外国人にとっても魅力的な町であるらしく、すでに7、8年ほど前、ニューヨークのモダン・アート美術館では、「新宿」だけをテーマにした大がかりな展覧会が、米国人の手によって開催されている。

新宿御苑は、新宿駅から歩いて約20分(地下鉄丸ノ内線新宿御苑前駅からは徒歩1~2分)のところにある公園で、面積は約58万平方メートルである。元高遠藩主内藤氏の下屋敷跡であり、戦前は天皇家の庭園だったこともある。苑内には日本式林泉庭園や芝生の美しい西洋庭園などがあり、春は桜、秋は菊が美しく、都会に住む人々の数少ない憩いの場となっている。

## I 大きな駅の前で (①~⑤)

映画は、まず画面いっぱいに新宿駅西口側の駅ビルの全体が、続いて駅の

西口が、そしてその雑踏の中に先に説明したおばあさんとその孫娘が映し出されるところから始まるのだが、この映画を海外で初級教材として使用するような場合、学習者は画面に現れた建物が新宿駅であることはもちろん、駅であることさえ分からぬのが普通であろう。中心的な交通機関が鉄道でない国や地域に住む人々にとって、我々が慣れ親しんでいる「マンモス・ステーション」は、かなり珍しいものに映るに違いない。ここでは、この場面を学習者が「大きなデパートの入口」と理解したとしても、学習上それほど大きな問題はないが、やはり教師は映画を見せる前に、「最初の場面は新宿という大きな駅のビルで、東京にはこのような駅がいくつある」という程度の情報を学習者に与えておくことが望ましい。

### I—1 おばあさんと孫娘がだれかを待っている (①~⑥)

さて、おばあさんと孫娘は駅の前でだれかを待っているようだが、孫娘が心細気に口を開く。以下、この小場面での会話である。

孫娘 「①おばあちゃん、おばさんは、遅いわね。」

おばあさん 「②いま、何時かしら……。」

孫娘 「③おばあちゃん、のの人も、だれかを待っているようよ。」

おばあさん 「④そうらしいね。」

孫娘 「⑤ちょっと、聞いてみましょうよ。」

おばあさん 「⑥そうだね。」

まず①において、「おばあちゃん」が呼びかけであることに気づかない学習者はないと思うが、初級のこの段階で「ちゃん」に初めて出合う学習者はいるかもしれない。「ちゃん」は、話し手が（かわいいと思う）相手（たとえば小さい子供など）に親しさをこめて使う接尾語である。この映画の場合のように子供が家族や親戚を表す親族呼称について使う場合は、やはり親しさ（甘え）がこめられていることは確かだが、いわば幼児語的用法であり、年令と共に「おかあちゃん」から「おかあさん」へ、「おねえちゃん」から「おねえさん」へと移っていくのが普通である。

また、名前の後につける場合は、普通、姓でなく名につけて使うほか、見知らぬ小さな女の子に「お嬢ちゃん、いくつ?」と使ったり、『赤頭巾ちゃん、気をつけて』となったりするので、「内輪の者について」というような辞書的説明は不適当であろう。なお、「赤ん坊」の愛称「赤ちゃん」などは一語として熟しており、現代語としてはそれに当たる「さん」を伴った語はない。

この最初のせりふの「おばあちゃん」によって、話しかけた相手は話し手(少女)の祖母らしいことが示されるのだが、後におばあさんが⑩で「知り合い」と言っているところを見ると、次の「おばさんは、遅いわねえ」の「おばさん」は、1)彼女の「伯母」・「叔母」の意ではなく、2)彼女が知っている「中年の女性」の意であろう。学習者によっては、母語のこの種の語に親族呼称としての用法しかないために、見知らぬ老人に「おばあさん、荷物お持ちしましょう。」と言ったりする用法につまずくことがある。来日早々、秋葉原の電気街で「おにいさん、このラジカセ2万円なら安いよ!」とやられて驚いたという留学生がいた。

呼称については、家族成員同士の用法に限っても面白い問題がいくつもあるが、教室では、待遇表現の指導の一環として学習段階を考えつつ計画的に扱う必要がある。映画などで示される具体的な人間関係を利用した指導はとくに効果的である。

次に「おばさんは、遅いわね。」の文の構造について触れておく。初級の学習者が映画の場面から自然に意味をとることができ、とくに疑問を持たなければわざわざ大きな問題として扱う必要もないが、「おばさんは、来るのが遅い」と補い、事実関係の理解を確認しておくことは意味がある。すなわち①の文は、「おばさんは」という主題部と「来るのが遅い」という解説部(「叙述部」)から成っており、その状況から明らかな部分が省略された文ということになる。

したがって映画のこの場面では、主題さえ省略して、単に「遅いわね。」と言うこともできるのだが、そうすると映画を見る人にとって二人がだれを

待っているのか全く分からなくなるし、呼びかけの「おばあちゃん」といっしょになって「おばあちゃん、遅いわね。」となってしまい、呼びかけのイントネーションに慣れていない初級の学習者には、映画の最初のせりふから意味が全くつかめないということにもなりかねない。

以上①では、「おばあちゃん」という呼びかけ語で、二人の登場人物の関係が示唆され、さらにその二人が、孫娘によって「おばさん」と呼ばれる女性を待っているのだということが示された。

②の「いま、何時かしら……。」は、おばあさんが、①を受けて「確かに遅い」と共感し、「約束の時刻からどのくらいたったのだろうか」というような気持ちで発したせりふである。疑問の意を表す終助詞「かしら」は、「質問」「依頼」「願望」などの意を婉曲に表す場合に用いるが、いずれの場合も話し手が自分自身に語りかけるような調子が基底にある点に特徴があり、普通は女性が多く用いる。

おばあさんは「いま、何時かしら……。」と言ってあたりを見回すが、時計はない。そこで孫娘が、だれかに聞けば分かるかもしれないと考えたのか、近くにいる女性を指して「③おばあちゃん、あの人も、だれかを待っているようよ。」と言う。

③の「の人」については、Ⅱ-4で別の用法が出てくるのでそこで触ることにする。また、Ⅰ-4、Ⅱ-1には「那人」が出てくるので対比して意味・用法を確認させるとよい。「だれか」については、学習者に「だれを待っているのか」と「だれかを待っているのか」の違いがはっきり理解されていればよい。

ここでこの映画の中心的な指導事項が現れる。「だれかを待っているようよ」の「よう(だ)」である。これは、次の④「そちらしいね。」の「らしい」とともに代表的な推定(不確かな断定)の表現形式である。

初級のこの段階の学習者にとっては、ていねいさのレベルや男性語・女性語の違いが、文法理解の妨げとなることがある。たとえばこの③、④についても、学習者は以下のようないくつかの整理ができるべきである。

ていねい体	普通体 (ぞんざい体)	
	男性 (中性)	女性
③' だれかを待っている <u>よう</u> です。	③'' だれかを待っている <u>よう</u> だよ。	③ だれかを待っている <u>よう(だわ)</u> よ。
④' そららしいです。	④ そららしいね。	④'' そららしいわね。

こうしてみると③の「待っているようよ」は普通体であり、それも男性はあまり使わない形であることをまず確認しておく必要がある。したがって、同じスピーチ・レベルでも話し手が男性なら③''を使い、ていねい体を選ぶ必要のある相手には③'を使わなければならない。

さて、③の「よう(だ)」という表現形式は、話し手が、そういう判断を下しうる状況・様子であるということを表す。いいかえれば、自分にはそういう状況・様子に思われるという話し手の不確かな判断を表すものである。指導にあたっては、学習者に映画の場面を思い出させて、なぜその少女(話し手)が「よう(だ)」を使ったのかを考えさせるとよい。「の人」で示された若い女性が、何度か時計を見たりあたりを見回したりしていたのだろう、というようなことが指摘できれば十分である。事実、映画では少女のこのせりふの後に女人をUPでとらえるショットが入る。

「ようだ」の意味上の簡単な理解ができたら 次にその語法について触れておく必要がある。ここでは「……ているよう(だ)」というように(補助)動詞の現在形に後接していることに着目させ、このほか動詞の過去形にも続くことを指摘する程度にとどめ、形容詞や形容動詞や名詞に続く用法は、先へいって具体的な例が現れたときに確認したほうがよからう。

- [1] 雨が降っているようですね。
- [2] どうやら雨が降るようですね。
- [3] 夜中に雨が降ったようですね。

④の「そららしいね」についても、ていねい体では「④' そららしいですね」となり、普通体でも話し手が女性なら「④'' そららしいわね」となるこ

とが多い。女性が「そららしいね」と言ったりするのは、話し手が自分の女性であることをあまり意識しない場合や自分の性に関係なく中性的に話したい場合などであり、女性でも老人になると中性化して映画の中のおばあさんのように、「そららしいね」を使うことがある点などに注意しておきたい。

「そららしい」の「そら」は、初級の学習者がだれでも知っている「はい、そうです」の「そら」と同じものと理解させてもよかろう。ここでは、すぐ前の③を受けて「誰かを待っている（=そら）らしいね」となっていることを確認しておけばよい。

「そららしい」の「らしい」については、すぐ前の「よう（だ）」同様、不確実ではあるが話し手が一定の判断を下し得る状況、様子など（=根拠）があるということを表す表現形式だという点だけおきておきたい。

「らしい」と「よう（だ）」の意味・用法上の相違については、いずれ触れなければならないが、ここ③、④などを材料に考えることは教授法上あまり賢明ではなかろう。なぜなら、③、④の「よう（だ）」と「らしい」を交換して

孫 娘 「③''おばあちゃん、あの人も、だれかを待っているらしいわ（よ）。」

おばあさん 「④''そのようだね。」

としても、多少のニュアンスの違いこそあれ、映画のここでの会話として十分受け入れられるからである。このように互換性のある用例で表現形式の違いを説明することは効果的ではない。先に述べたように、ここでは「ようだ」との類似性だけを確認しておき、相違点を考えるのに都合のよい用例が映画の中に現れるのを待つことにしよう。

次に、「らしい」の語法についてみておこう。④の「そら」+「らしい」は、最初の例としてはあまり適当ではないが、ここでは「そら」を体言として扱い、名詞や代名詞などには「らしい」がそのまま後接することを確認させておこう。

[4] 暗くてよくわからないけど、あそこにいるの、佐藤さんらしいで

すね。

[5] 暗くてよくわからないけど、あそこにいるの、【彼】らしいですね。

[6] 「佐藤さんの帰国、来月の【十日】らしいよ。みんなで成田まで行こう。」

ここでは、体言に続く場合の「ようだ」と「らしい」の相違をはっきりさせておくとよい。すなわち、上の例でいえばそれぞれ「佐藤さんのようだ」、「彼のようだ」、「十日のようだ」となる点に十分注意させたい。

また、「うららしいね」の「うら」に触れたところで、「うららしいね」を「だれかを待っているらしいね」と言い換えたので、動詞に続く場合についても教えておこうというのであれば、「ようだ」のときと同様、動詞の現在形と過去形に続くことだけおさえておけばよい。

[2]’ どうやら雨が降るらしいですね。

[3]’ 夜中に雨が降ったらしいですね。

「ようだ」のときの例文〔2〕,〔3〕をそのまま用いたのは、まだ「ようだ」と「らしい」の相違を問題にしていないからである。

⑤の動詞「聞く」(質問する)の基本的な用法は、「AがBニCヲ聞く」であり、映画のせりふでは、A, B, Cの三要素がいずれも表面に現れていない。Bの「あの人」とCの「時刻」は省略されたと考えられる。母語にこの種の省略がないような学習者には、こうした用法に早く慣れさせるよう指導する必要がある。「時刻 (=C) を聞く」を話の流れから正しくつかむことが難しいという学習者もあろう。とくに聴解の指導では、一対の会話をひとつずつ理解していく段階から、会話をひとまとまりの流れとしてとらえ、その文脈に沿って省略を補ったりしつつ理解する段階へと学習者をいかに導くかが大きな課題となる。

こここの「ちょっと」は、「軽い気持で」の意で、この場面では「ために」の意になるが、学習指導上は、後にくる事柄をやわらげるという基本的な働きを確認させることのほうが大切である。「きょうは あめが ふっています」の解説書(p.39~40)を参照されたい。

「ちょっと」に「ためしに」というニュアンスを感じるのは、実はその後の「聞いてみる」によるものであろう。この「みる」は、何かが発見されたり確認されたり新しい情報が得られたりすることを期待してある行為をする場合、その行為を表す動詞の「一て」の形の後に続けて用いられる補助動詞である。映画の「⑥ちょっと、聞いてみましょう。」について考えてみると、「～(て) みる」を用いない「⑥' ちょっと、(あの人に) 聞きましょうよ。」の「聞く」が単に「尋ねる」の意しか持たないのに対し、⑥の「聞いてみる」には、「その人が時計を持っていて、正確な時刻がわかるかもしれないから……」といったニュアンス(期待)が「尋ねる」の意に添えられることになる。したがって、学習者には、(時間的に) すぐ後に確認や発見が期待されているような場合、「～(て) みる」を用いたほうがずっと自然な表現となるということを教えておきたい。

[7] わたしの部屋にあるかもしれないから、ちょっと探してみるわ。

It's probably in my room; let me take a look.

[8] 文法的なミスがないかどうか、一応終わりまで読んでみてくれないかなあ。

Would you read through it to see if there are any grammatical mistakes in it.

なお、補助動詞「みる」は普通意志性の動作動詞につくが、不注意に英語の‘try to’に置き換えて説明したりすると、その意志性のみを強調することになり、学習者が意志を表す言語形式「～(よ)うとする」などと混同するおそれがあるので、指導にあたって十分注意する必要がある。

[9] 起きあがろうとしたんですが、やはり無理でした。

で「～(て) みる」が使えないことに注意したい。「起きあがってみたんですが」となると、その後は「別に痛みはありませんでした」などになり意味の上で全く異なることが分かる。

瞬間性の薄い動詞なら、どちらの用法も可能だが、「やろうとしたけど出来なかった」は着手した感じが弱いのに対し、「やってみたけど出来なかっ

た」は一応手をつけてみたことを意味する。それは、「出来なかった」の前に「忙しくて」と「難しくて」のどちらが入りやすいかでも明らかである。

「ちょっと、聞いてみましょうよ。」の「ましょう」が「勧誘」であることは、初級の学習者にも問題のないところであろう。指導上の扱いについては、「おみまいに いきませんか」の解説書を参照されたい。

⑥の「そうだね。」は、その前の「ちょっと聞いてみましょうよ。」に対する同意であるが、ここでは、「そうだね」が普通体で男性や年輩の女性が用いる表現であることに注意させたい。女性は普通「そうね」（これは男性も用いる）が多く、ていねい体では男女ともに「そうですね」になることなどを確認しておくとよい。

⑥でおばあさんが孫娘に同意し、二人は時刻を聞くために、誰かを待っている様子のその女性に近づいて行く。

## 1-2 女の人に時刻を聞く（⑦～⑬）

この小場面はおばあさんが見知らぬ女性に声をかけるところからだが、ここでの会話は以下の通りである。その最初のせりふ⑦についてだが、学習者は、ここまで会話の流れをしっかりとつかんでいれば、実際に⑦を聞かなくても、十分その内容を予想することができるはずである。

おばあさん「⑦もしもし、すみませんが、いま、何時でしょうか。」

女の 人「⑧11時半ですよ。」

⑨だれかをお待ちのようですが……。」

おばあさん「⑩ええ、知り合いを待っているんです。」

⑪11時に来るはずなんですが。」

女の 人「⑫もう30分も過ぎていますね。」

⑬電話をしてみたほうがいいですよ。」

⑦の、呼びかけに用いられる感動詞「もしもし」は、見知らぬ人に声をかけるときに使われるが、どちらかといえば何かを教えたり注意を促したりする際の呼びかけに多く用いられるようだ。

[10] もしもし、何か落ちましたよ。

[11] もしもし、ここは禁煙ですよ。

映画の場面のように、『見知らぬ人に何かを尋ねるような場合には、「あのう（すみませんが）……』と呼びかけることのほうが多いのではないだろうか。とりわけ若い世代ではその傾向が強いように思われる。また、この「もしもし」は電話で使う表現として初級の学習者にもなじみの深いものである。（「おみまいにいきませんか」解説書参照）

その後の「すみませんが、いま、何時でしょか。」の「何時でしょか」が「何時ですか」とどう違うのかに疑問を持つ学習者がいるかもしれない。

「でしょか」については、すでに「もみじがとてもきれいでした」で、そのサブタイトル「です、でした、でしょ」が示す通り、映画の中心的指導事項として扱っているが、そこで紹介された「でしょ」は「現時点における話し手自身の不確かな判断や推量を表す」という基本的な用法についてであるので、ここでは、「でしょか」の形で質問をやわらげる働きを持つ用法についてコメントしておくとよい。話し手が遠慮したり恐縮したりする姿勢に關係する婉曲表現としてのこうした用法は、学習者が日本人の普通の言語生活に接する際しばしば問題になるので指導上注意を要する。

「何時でしょか。」と尋ねられた女性は、自分の腕時計を見て「⑧11時半ですよ。」と答えるが、映画ではかなり無愛想で優しさが感じられない。その素っ気なさは、答えるときの顔の表情だけでなく文末の音調にも現れているが、都会人それも若い人々の他人に対する平均的な対応の形と考えるべきなのかもしれない。事実、その女性が他人に対して無関心な冷たい人ではなく、むしろ平均以上に親切な人であることは、それに続く彼女の行動を見れば明らかになる。

「11時半ですよ。」と時刻を教えたものの何となく気がかりで、おばあさんと少女をあらためて眺め、そしてかけたことばが⑨の「だれかをお待ちのようですが……。」である。ここで再び「ようだ」が現れるが、基本的には先に見た⑨の「だれかを待っているようよ。」の「よう(だ)」と同じである。

その違いは、1) ⑨の「待っているよう」が⑨では「お待ちのよう」という形で尊敬の表現になっている点と、2) ⑨が「……ようよ。」と普通体に終助詞「よ」をつけて言い切っているのに対し、⑨では「……ようですが……。」というようにていねい体をさらに「が」をつけてやわらげた形にしている点である。

1)について、語法的には、11~12ページで「らしい」と対比させて、「ようだ」が名詞や代名詞に後接するとき「～のようだ」となることをおさえたので、「お待ち」を名詞的にとらえれば学習者がつまづくことはあるまい。ただし、「お待ち」ですか。」「お持ち」ですか。」「お休み」ですか。」「お出かけ」ですか。」などの敬語表現に慣れていることは必要である。

2)については、「……ようですが……。」が「……ようですね。」以上に間接的でやわらかな質問になっている点をおさえておきたい。「だれかをお待ちのようですが……。」の「……」をしいて補えば「違いますか？」になるのだろうが、「……」にぶつかるたびに学習者にそれを補って理解させる指導法は考え方である。むしろこの「が」は、単に発話をやわらげたりする働きを持つ終助詞として理解させたほうがよかろう。なお、受話器を取って「はい、佐藤でございますが。」と言う人がいるが、その場合の「が」は落として「はい、佐藤でございます。」とすることができるても、映画の中の例「だれかをお待ちのようですが。」は、「が」をとると具合が悪くなる点に注意しておきたい。

次へ進む前に、この⑨で大切なことは、先に見たように⑨の「おばあちゃん、あの人も、だれかを待っているようよ。」の「よう(だ)」に「らしい」を使って「⑨' おばあちゃん、あの人も、だれかを待っているらしい(わ)よ。」とすることができたのに対し、「⑩' だれかをお待ちらしいですが……。」はこの場面で不自然であるという点である。ここで「らしい」と「ようだ」の意味・用法上の相違をおさえることができる。映画の中の女性（話し手）は、⑨のせりふをはく直前に、おばあさんと少女の二人を短時間ではあるが観察している。その様子は、映画でもひとつのショット（女の人のU.P）と

して大切に扱われている。すなわち、だれかを待っている様子だととらえた判断が正しいかどうかを相手に確かめているのだが、ここで「らしい」より「ようだ」のほうがはるかに自然だということは大切なことである。(p. 61参照)

反対に、「らしい」を使った例を考えてみるとよい。たとえば、

[12] あなた、最近お忙しいらしいですね。

は、話し手自身の観察による判断というよりは、他から得た情報などの客観的な根拠にもとづいてなされた判断と考えられる。ここでは「らしい」と「ようだ」の意味・用法について以上の点を十分おさえておきたい。

⑩の「ええ」は、女人の「⑨だれかをお待ちのようですが……。」に対する肯定の反応であり、おばあさんはさらに「知り合いを待っているんです。」と続いている。

「知り合い」という語は、若い外国人学習者が上手に使うのは難しそうだ。日本人でも最近は、親しい知人の意を表したければ「友だち」とか「友人」と言い、そういう意味を表す意図や必要がなければ単に「人」と言ったりすることが多いようである。

[13] { A: もう少しゆっくりしていらしたら……。  
B: ええ、ありがとうございます。実は、これから新宿で人と会う約束がありますので……。

この「人」は、「親友」であっても「恋人」であっても、「同僚」であってもいい。「知り合い」よりは先に教えたい語である。

さらに、⑩では「……を待っているんです」というように「のだ」が使われている点に注意させたい。説明・説得型の表現に多く用いられる「のだ」である。映画のこの場面でも「⑩' ええ、知り合いを待っています。」では具合が悪い。この「のだ」については、「もみじが とてもきれいでした」の解説書(p. 31～)ですでに述べられているが、詳しくは、

国立国語研究所 『現代語の助詞・助動詞』 秀英出版 (1951)

林大 「ダとナノダ」, 『講座現代語6・口語文法の題題点』 明治書院

(1964)

- 佐治圭三 「“ことだ”と“のだ”——形式名詞と準体助詞——(その二)」,  
『日本語・日本文化』第3号 大阪外国语大学留学生別科 (1972)
- 久野暉 『日本文法研究』 大修館 (1973)
- 山口佳也 「“のだ”の文について」, 『論集日本語研究7・助動詞』 有  
精堂 (1979)
- 国際交流基金 『教師用日本語教育ハンドブック④・文法Ⅱ』 (1980)
- 田中望 「日常言語における“説明”について」, 『日本語と日本語教育』  
第8号 慶應義塾大学国際センター (1980)

などを参照されたい。

再び映画の場面に戻るが, おばあさんは「知り合いを待っているんです。」に続けて「@11時に来るはずなんですが……。」と言い, さも心細気に周囲を見回す。ここでは「はず(だ)」の意味・用法を簡単に確認しておく。

ここでの「はずだ」は, 話し手が相手と11時に会う約束をしたのだから, (そしてその相手は普段約束に遅れたりすることのない人だから, 等の理由から) 必ず来る, というきわめて強い予測もしくは期待を表している。客観的な根拠にもとづいて, ある事柄が当然実現するだろうという推量判断を表すのが「はずだ」の意味・用法上の一般的特徴であり, 主観的に単にそう思い込んでいるような場合には「はずだ」が使いにくい点に注意させたい。

次に, 映画の「……はずなんです」の「のだ」に続く前の形が「はずだった」という形をとっていない点を確認しておきたい。(一般に形式名詞は, 学習者が中級以上に進んでも, その語法上とくに接続の上で誤用が見られるものである) ここで学習者の中には, 映画の中のおばあさんはその「知り合い」が11時に来なければいけなかったのに, 11時半の時点でなぜ「@11時に来るはずなんですが……。」と言って「@' 11時に来るはずだったんですが……。」と言わないのか, という疑問を持つ者があるかもしれない。「@'' 11時に来たはずなんですが……。」はまた別の意味になるのでここでは問題にしないが, @と@'' は微妙である。それは, 話し手の心的態度によるといえよ

う。すなわち、約束の時間から30分もたった、もう来ない、と判断すれば「来るはずだった」となり、必ず来るという強い期待があり、30分遅れて来ても40分遅れて来ても、それはやはり「来る」ことなのだと感じれば「11時に来るはずだ」となるのであろう。「11時に来るはずなのが、まだ来ない」というとらえ方である。したがって、話し手の性格やその場の状況などによって微妙に変わってくることになる。このおばあさんは、「11時半」と言われてもあまりピンとこなかったようで、まだその「知り合い」を待っている気持ちに変わりはない。非常に忙しい人で、気の短い人やあきらめの早い人などだったら「来るはずだった」ととらえ、さっさと帰ってしまうかもしれない。しかし、11時の飛行機に乗る「知り合い」を見送ろうと空港で待っている「おばあさん」だったらどうだろうか。話し手の性格などに関係なく、30分ならずとも5分でも遅れたら必ず「11時の飛行機に乗るはずだった」ととらえるに違いない。

「はずだ」については、それ自体の時制やその前にくる語の種類やそれを含む句の時制などによって意味・ニュアンスが違ってくるので、「はず」を中心的学習課題とする指導を行う場合には、十分な準備が必要となる。

森田良行 『基礎日本語2』 角川書店 (1980)

国廣哲彌他 『ことばの意味・3』 平凡社 (1982)

などの「はずだ」に関する項が大いに参考になろう。

⑫⑬は、女人がもう一度時計を見て言うせりふである。「⑫もう30分も過ぎていますね。」では、「30分」に添えられた副助詞「も」の働きを確認し、「過ぎていますね」の「過ぎて」+補助動詞「いる」に注意させたい。アスペクトを表す「ている」については、「きょうはあめがふっています」で扱われている。ここでの例「過ぎている」は、いわゆる「動作・作用の結果の状態」の意味を表す用法である点を確認しておきたい。

女人は、⑬で「知り合い」に電話をかけてみることを勧めるが、それ以上に親切にする気はないらしく、画面では彼女自身が自分の相手を探す様子が示される。指導上ここでおさえておきたいのは、「⑬電話をしてみたほう

がいいですよ。」に用いられた助言の表現形式「～ほうがいい」である。文末のイントネーションなどにもよるが、一般に「～ほうがいい」「～ほうがいいですよ」などは強い助言もしくは勧告を表すことができ、ときには間接的な命令にさえなる。ところが「～ほうがいいと思いますが……」とか「～ほうがいいんじゃないでしょうか」などの形にすれば、意見・アドバイスを表す、穏やかな表現として使うことができる。なお、「～ほうがいい」については、「おかげこを みに いって もいいですか」の解説も参照されたい。

### I—3 電話番号が分からぬ (14～21)

(30分も過ぎているのだから) 来るはずの人に電話をしてみたほうがいい、という勧めを受けて、おばあさんはバッグを開け電話番号を探し始める。一見冷たそうだった女の人が親切な人であることが分かってくる。以下はこの小場面での会話。

おばあさん「14電話番号を書いた紙を確かにここに入れたんですがね。

15落としたらしいんですよ。」

女の 人「16電話帳を見ましょうか。」

おばあさん「17さっき見たんですが、わかりませんでした。」

女の 人「18じゃあ、番号案内に聞きましたか。」

おばあさん「19ええ……。」

女の 人「20わたしが、聞きましたか。」

おばあさん「21お願いします。」

この小場面には、電話に関する語がいくつか現れる。基本的な表現を加えて整理しておくとよい。下線はこの映画で使われたもの。

- 1) ～に電話 (を) する, ～に電話をかける
- 2) ～から電話がある, ～から電話がかかる  
～から電話をもらう, ～に電話がある
- 3) ～が電話に出る
- 4) 電話番号, 局番, 市内／市外局番

- 5) 公衆電話, 赤電話, 電話ボックス
- 6) 長距離電話, 国際電話
- 7) 電話帳, 番号案内

さて, ⑭では「電話番号を書いた紙」という連体修飾について学習者の注意を促しておきたい。おばあさんの立場で考えた「私が電話番号を紙に書きました。」という文から, 必要に応じて「私が電話番号を書いた紙」, 「私が紙に書いた電話番号」, 「電話番号を紙に書いた私」などを自由に導くことができないと初級段階を終わったことにならないだろう。どんなに語彙数が多くても, どんなに発音がきれいでも, スピードが速くても「電話番号を書きました紙」などとやっているうちは, 日本語の基礎を修めたことにはならない。

⑭について, もうひとつ注意しておきたい。ここでは「確かに」が使われているが, 「たしか」と混同する学習者が多いので, いずれ対比して確認させる表現のひとつとしてメモでもしておくとよい。

[14] あれは, たしかに十年前の夏のことでした。

[15] あれは, たしか十年前の夏のことでした。

⑮の「落としたらしいんですよ。」では, 二つのことを確認しておきたい。

ひとつは, 動詞「落とす」の用法である。他動詞だが, ここでの例のように無意志動詞的な用法のあることに注意させたい。(「身体をこわす」「おなかをこわす」なども同様)。

[16] あなたが大切にしていたお皿, さっき洗ってて, 落として割っちゃった。ごめん……。

[17] 絶対に割れないって書いてあるから, 床の上に落としてみたら, やっぱり割れたぞ, この皿。

⑯についてもう一つの確認しておきたい。ここでまた「らしい」が使われているのだが, この「らしい」もすでに見た④の「らしい」と同様, 「ようだ」との違いを気づかせるには不都合な用例といわざるを得ない。「⑯' 落

としたようなんですよ。」 としてもここでの会話の流れを乱すことはない。  
(この映画では「婉曲」としての用法は扱っていない。) したがって、教師は文法書で調べた通り、「らしい」は、「ようだ」と比べ、その推量判断の根拠が、どちらかといえば自分自身の観察より他から得た情報にあるというような説明を、映画のこのような部分で与えるべきではない。(→⑨)

おばあさんは、「電話番号を書いた紙を確かに入れた」と言っているのだ。  
なのに今、いくら探してもそれがない。だから「落としたにちがいない」と  
さえ、おばあさんは感じているかもしれない。にもかかわらず「落としたら  
しい」などと他人ごとのような表現をしているところが、難しくもあり、また面白くもあるのだが、推量の表現について初めて学んでいる学習者には、  
④の場合同様に基本的な意味・用法だけを確認しておくほうがよい。

ただし、「らしい」の語法について、④では体言に後接する例([4], [5], [6])を確認し、参考として動詞の現在および過去の形に続く例([2]', [3]')をあげたが、ここで、動詞+「らしい」が映画のせりふとして現れたことになる。動詞+「ようだ」は、すでに③で現れ、用法も[1], [2]で確認したので、学習者にとって、⑯を「ようだ」を用いて言いかえることは難しくない。難しいのは、「のだ」との接続で「⑯ 落とした  
ようなんです。」である。中級へ進むまで、繰り返し繰り返し注意してやる  
必要のある点である。

⑯の「電話帳を見ましょうか。」については、ここでの「見る」が「調べる」に近い意である点をまず確認させたい。次に「ましょう」だが、これは「(私が)見ましょう」という親切な申し出に「か」をつけて、一応相手の意向を尋ねる、という形であろう。「意志」の用例として確認しておきたい。「ましょう」の「勧誘」の用例は、すでに④で見た。

⑰の「さっき」は、推理小説的に考えれば11時15分以前のことだろう。お  
ばあさんが時計を持っていれば、11時15分ごろだといえるのだが、正確な時  
刻がわからなかったのだから、11時前から心配し始めていたのかもしれない。  
「さっき」は、日常会話で非常によく用いられる、初級段階から積極的

に教えたいたい語のひとつである。（「ついさっき」を関連表現として示してもよい。）いくつかの場面を作つて、実際に使われるときに「さっき」が指す時間的な幅について確認させるとよい。（「そろそろ」、「そのうちに」などと比べればずっとやさしい。）

⑯の「番号案内」がわからないという学習者には説明が必要だが、すぐあとに電話で番号を問い合わせる実例が出てくるのでそれを利用するとよい。

⑯の「ええ……。」については、その独特な音調に注目させ、否定的反応であることを理解させたい。「ええ、聞こうと思ったんですが、（聞き方が）よくわからないもんですから……。」ぐらいの雰囲気がつかめるとよい。

お年寄りには難しいのかもしれない、とでも思ったのか、その女の人はそれでは自分が調べてあげようと申し出る。それが⑯の「わたしが、ききましょうか。」である。「ましょうか」についてはすでに⑯で触れた。ここでの「わたし」は、「きく」という行為の主体が「わたし」にほかならないことを明示するものであり、「が」の働きを確認させるために適当である。

（考えてみればこの女性、都会では珍しいほど親切な人だが、映画作りの上の難をいえば、⑯のせりふを言うときの女性の表情がいかにも固い。一見無愛想に見えるが、実は大変優しい人ということなのだろう。）

⑯の「お願いします。」は難しくないが、場面から明らかな動詞の意味をこめて使われる依頼の表現にも注意しておきたい。「ビールを三本お願いします」「新宿駅までお願いします」「日本語でお願いします」などがそれである。

女人に知人の電話番号を調べてもらうことになり、三人は青い電話器が数台ならぶ、すぐ近くの公衆電話のコーナーへ行く。そこで女人は電話をかけようとして、手にしていたバスケットを下に置くが、そのすぐ隣におばあさんもバスケットを置く。全く同じといっていいほどよく似たバスケットである。映画では二つのバスケットがUPで映されるのだが、少し説明しすぎで「ああ、これは後で間違えさせるのだな」と感じる学習者もあるかもしれない。

I—4 女の人が電話で問い合わせてくれたがやはり分からぬ (㉒～㉔)

この小場面の中心は、女の人がおばあさんに代わって番号案内に問い合わせるときの会話である。

女の 人「㉒名前と住所を教えてください。」

おばあさん「㉒名前は、さとう はな。」

㉔住所は、世田谷の方です。」

(女の人がを 104 回す。)

女の 人「㉔すみません。」

㉔名前は、さとう はな。」

㉔住所は、世田谷だそうです。」

——  
㉔はい。

——  
㉔そうですか。」

(受話器を耳にあてたまま、おばあさんに向かって、)

㉔その人のご主人か息子さんの名前は?」

おばあさん「㉔それが……わからないんです……。」

女の 人「㉔わからないそうです。」

——  
㉔そうですか。」

㉔どうも……。」

㉔㉔は、初級の学習者にも理解しやすい。㉔でおばあさんが「さとう はな」と言っている人が、①の「おばさん」であり、⑩の「知り合い」であることを確認しておくとよい。

㉔の「世田谷」について詳しく触れる必要はない。「東京23区のひとつ」ぐらいで十分である。「世田谷の方」の「方」は、おおよそ、その方向に当たる場所の意であり、単におおよその場所を示す「あたり」や「辺」などと

異なる。学習者には、比較・対照を表す「方」の用法と混同させぬよう注意したい。

女人人がダイヤル 104 を回し、番号問い合わせの実際が示される。<sup>25</sup><sup>26</sup><sup>27</sup> も分かりやすいが、確認すべきは「<sup>27</sup>住所は、世田谷だそうです。」の「そう」である。この映画の指導事項のひとつ「伝聞」を表す「そうだ」が現れる。この場面では、話し手（女人人）がダイヤルを回す前におばあさんから聞いた情報（「住所は世田谷だ」）を、そのまま聞き手（番号案内の係り）に伝えているので、「そうだ」の最も基本的な用法を理解させることができる。ところで学習者は、伝聞の表現を全く知らない段階で、この種の事柄をどのように表現するだろうか。（映画のこの場面には全くそぐわないが）おそらく引用表現を用いて、

[18] おばあさんは、住所は世田谷だと言いました。

[19] おばあさんは、住所は世田谷だと言っています。

などと表現するだろう。いずれも情報提供者を主体にした表現であるが、だれが言ったかより、自分が他から聞いた情報の内容が大事だと考え、思いきって断定の表現にしてしまって、

[20] 住所は世田谷です。

とする学習者もあるかもしれない。実は、映画のこの場面では、「<sup>27</sup>住所は、世田谷だそうです。」の代わりにこの [20] を使うことさえできる。このことからも分かるように、伝聞の「そうだ」は、他（人）から得た情報を、断定として表現するほど強くはないにしても、ある程度確かなものとして受けとめている主体が必要である。たとえば、[18] [19] については、話し手の考えを加えてそれぞの文の後に「……が、それはうそです。」と続けることができるが、「そうだ」を用いた<sup>27</sup>は、断定文の [20] と同様それができない。したがって、この「そうだ」は、「他人から聞いたことだが、これは確かだ」というようなニュアンスを添えたいとき、またある情報について話したいがその情報の出所について言う必要がない場合（映画の例）や言いたくないような場合に使われる表現形式だということができる。

語法について、指導上最も大切なことは、「世田谷です。」 という形で入ってきた情報でも必ず「世田谷だそうです。」 とする操作である。用言すべてについて十分な練習が必要なところである。「元気です。」 について「元気ですそうです。」 などというひどい誤用はすぐなくなろうが、「元気そうです。」 などはいつまでも教師を悩ませるものである。いわゆる様態の「そうだ」と対比させて、というよりは、先に提出したほう（ここでは「伝聞」）をしっかり身につけさせることが大切である。

また、伝聞の「そうだ」の語法上の特徴として、それ自身、もっぱら肯定、現在の形で使われ、否定や過去の形の用法のないことも大切だが、映画のこここの場面で一度に説明するよりは、短文作りなどの練習の過程で、表現意図と伝聞表現との関係を確認しつつひとつおさえていったほうが学習者には親切だろう。

「㉙はい。」 と「㉚うですか。」 は番号案内の係が何か言ったことに対する女の人の反応だが、映画では案内係の発話が音声化されていないので想像するしかない。㉙の前のポーズは短いので「世田谷ですね？」 ぐらいだろう。㉚の前には3秒ほどのポーズがあるので学習者に考えさせてみるのもよい。案内係は、「電話の持ち主（登録者）の名前がないと、お調べできないんですが……。」 とでも言っているのであろう。そのおおよそが想像できたという学習者には、もはや㉚の意味を説明する必要はない。

なお、基本的なことだが㉙の下降調のイントネーションに注目させ、上昇調と対比させて確認させておくとよい。

㉙—a そうですか。 (了解・納得)

㉙—b そうですか。 (質問・確認)

aの場合もbの場合も下降、上昇の程度を激しくすることによって、それぞれ「驚き」や「疑い」を表すことができる。このようなことは、初級段階から指導できるものである。

㉚の「それが」は、「それ」が単に㉚の「名前」を指すと考えるよりは、質問・要求などで相手が期待したことを「それ」で受け、「残念ながら」と

か「申し訳ないが」とかの含みを添えつつ、期待に反する事柄を述べるときに用いる感動詞的用法であると考えたほうがよからう。「これが」「あれが」に、この種の用法のないことはいうまでもない。

- [21] { A : 今晚のパーティー来られるんでしょ?  
B : それがね、急に行けなくなっちゃったのよ。
- [22] { A : おい、君は辞めないんだろう?  
B : いや、それが、辞めることになっちゃったんだ。

㉙は、女人人が㉘の内容をそのまま番号案内の係に伝えているせりふで、㉗と同じく伝聞の「そうだ」が使われている。㉛をより厳密にとらえて「㉙' わからない んだ そうです。」ということもできる。同様に㉗は「㉗' 住所は、世田谷の方だそうです。」と言ってもよかったです。伝聞表現は、伝える内容の実質を変えない限りにおいて、表現主体の判断で枝葉を切り落としたりすることができるが、学習者から質問が出なければ、今ここで問題にすることはない。

㉚の前の2秒ほどのポーズも学習者に考えさせるとよい。「㉚ そうですか。」の調子などがそのヒントになろう。

㉛の「どうも……。」は、普通（会釈するなどして）心をこめて言えば、立派な感謝の表現になることを確認させたい。中途半端な調子の「どうもありがとう。」よりは、心のこもった「どうも」のほうがむしろていねいでさえある。

## I—5 二人で先に目的地の公園へ行くことにする (㉜～㉙)

親切な女人人が、二人のために番号案内に問い合わせてくれたが、結局知人の電話番号は分からなかった。以下は、女人人が受話器を置いたところからの会話である。

女の 人「㉜ だめですね。」

おばあさん「㉜ どうもすみません。」

孫 娘「㉜ わたしたちだけで、先に行きましょうよ。」

おばあさん「㉙そうね……。」

孫 娘「㉙きっと、あとから来るわよ。」

㉕の「だめ」は、禁止の表現などで初級の学習者になじみの深いものだが、ここでは不可能、失敗などを表す用法を学ばせたい。

㉖は、「お手数かけて本当にすみません」という単なる謝罪の意だけでなく、同時に相手のその行為に対する感謝の気持を表している。最近は、「すみません」のこの用法が少なくなっているので注意しておく必要がある。

㉗は孫娘の新しい提案だが、「わたしたちだけで」が「おばあさんをこれ以上待たないで」「おばあさんを含めない二人で」などの意であることを確認させなければならない。副詞「先に」の用法はやさしくないが、ここでは「おばあさんが（ここに）来る前に」「おばあさんが（目的地へ）行く前に」というように順序が問題になる点に注意させ、以下の用例などを確認させるとよい。

[23] まず先に、手紙を書いて、次に、この本を読むつもりです。

[24] 今日は、ほかに用事がありますので、お先に失礼いたします。

㉘は、孫娘の提案㉗についてのおばさんの反応だが、そのイントネーションが「そうねえ」となっており、文末もあいまいな音調なので、ここでは「同意」ではなく「迷い」・「考慮中」を表していることに注意させたい。画面では、「そうねえ……。」と言ってからも人を探すおばあさんの様子がはっきり示される。

そこで孫娘は「㉙きっと、あとから来るわよ。」といって、二人だけで先に行くことを促す。おばあさんはまだあきらめきれない様子ではあるが、それでも一応あいまいにうなずく。

㉙では、「きっと」と「あとから」と「来る」に触れておく。

「きっと」は、推量判断に関する副詞として大切だが、ここでは「おばさんは、行き先を知っているんだし、自分が遅れたこともわかっているんだから」というような「根拠」をもとにかなり強い確信を表すが、「必ず」「まちがいなく」「絶対(に)」などよりは確信度が低いことを確認しておけ

ばよいだろう。

「あとから」は、⑬の「先に」の対語として扱うと理解させやすい。

[25] 僕はあとから行きますから、お先にどうぞ。

ここでは扱わないにしても、指導する側の準備として「あとから」と「あとで」「次に」などの用例を整理しておくとよい。

⑭の「来る」について疑問を持つ学習者がいるはずである。この「来る」を「待ち合わせの場所（＝駅）に来る」と考え、何も疑問を感じない学習者がいれば、それこそ誤解である。孫娘は、⑭で「（目的地へ）先に行きましょう」と言っているが、⑭で「（おばさんは）きっと、あとから来るわよ。」と言うとき、彼女は自分自身をすでに目的地に置いているということを確認する必要がある。「行く」「来る」は、「基本語であるのに」というより「基本語だからこそ」難しい語のよい例である。

## I—6 公園は桜がきれいだそうだ（⑭～⑯）

しっかりした少女だなどでも思ったのか、女人人は少女の肩に手を置いて話しかける。以下この小場面の会話である。

女の 人「⑭お嬢さん、どこへ行くんですか。」

孫 娘「⑮新宿御苑です。」

女の 人「⑯ああ、いま桜がきれいだそうですね。」

おばあさん「⑯そうらしいですね。」

⑯どうも、いろいろありがとうございました。」

女の 人「⑯いいえ。」

⑯どうぞ気をつけて——。」

孫 娘「⑯さようなら。」

女の 人「⑯さようなら。」

おばあさん「⑯さようなら。」

---

⑯ごめんください。」

こうして二人はその場を去るのだが、そのとき孫娘が間違えて女人のバスケットを取り上げる。はっきりしすぎるほどの伏線的ショット(p.23)があったので、ここでは「ああ、やっぱり」と感じる学習者も多いのではなかろうか。

さて、④では、呼びかけに使われた「お嬢さん」に注意しておこう。「娘」の尊敬語としてなら、たとえば「佐藤先生」が60才でも

[26] 佐藤先生って、明治時代の哲学者佐藤元のお嬢さんなんですか

というように使うことができるが、呼びかけに用いられる場合の対象は、普通少女に限られる。対象がもっと若ければ「お嬢ちゃん」なども使われる。その対語は「お坊ちゃん」である。しかし、成人した若い女性に声をかける表現として「お嬢さん」はあるが、男性用の対語は見当らない。

④の「新宿御苑」については解説書の冒頭の部分(2.2.2.)で触れた。「新宿御苑です。」の「です」については、別の解説書でたびたび触れているので、「うつくしいさらになりました」の解説書(p.9)などを参照されたい。

④で再び伝聞の「そうだ」が現れる。④のトピックを補うと、「④'ああ、新宿御苑は、いま桜がきれいだそうですね。」となる。なぜここで「そうだ」が使われたか学習者に考えさせるとよい。「友達に聞いたからだろう」とか「新聞で読んだのだろう」などの想像ができればよい。接続について「形容動詞+そうだ」で「きれいだ」の「だ」を落としてはならないことを強調しておこう。

④では、推定(不確かな断定)の「らしい」が使われる。I-1にあった「④うらしいね。」のていねいな言い方であることを確認させる。「らしい」の前の「そう」は、④の「桜がきれいであること」を受けている。自分はまだ新宿御苑に行ってないので、女性の言ったことに「そうですね」と反応することはできない。しかし「おそらくそうだろ」と推量判断をすることができるような根拠、すなわち「私の友だちもそう言っていた」、「昨日の

夕刊にもそう書いてあった」、「あなたもそう聞いている」などの情報があるために「④そうらしいですね。」となつたと考えられる。（「ようだ」との比較については、p.16~17を参照されたい。）

④は、世話になった人に感謝する慣用表現。

⑤もその慣用的な受け答えだが、「いいえ」の音調が大切である。音調によっては、「どういたしまして」の意味が表しきれないことに注意。

⑥も慣用表現。場面や相手によって、⑥の他にも「気をつけてね」、「どうぞお気をつけて」、「どうぞお気をつけになってください」などのあることを確認しておくとよい。

⑦⑧⑨はいずれも別れのあいさつ「さようなら」だが、目上の人に対して毎日使う表現として適切でないことに注意させたい。質問か何かあって教師を訪ねていた学生が研究室を出る際に「さようなら」と言つたら、不適切な表現として注意を与えるべきであろう。同様に、「こんにちは」、「お元気ですか」などについても、何かの機会を利用して、どんなときに使え、どんなときには使えないかなど確認しておくとよい。そのためには、教師が“学習者用日本語”に慣れてしまつてネイティヴとしての語感を麻痺させることがないよう注意すべきである。ある学習者に「毎日会う普通の日本人は『お元気ですか』なんて聞かないのに、日本語のクラスへ行くと○○先生が毎日『お元気ですか』って聞くんですけど、どうしてですか」と聞かれて説明に窮したことがあった。

⑩の後で少女が間違えて女性のバスケットを取り上げることについてはすでに触れた。

⑪の「ごめんください」も慣用表現。学習者の平均年令はあまり高くないのが普通だが、若い学習者がどんな場合に「ごめんください」を使うかをしっかりおさえておくべきである。

人の家を訪問するとする。まず電話をして相手の都合を聞く。話が終わって受話器を置く前の挨拶には「(では,) ごめんください」がよく使われる。

玄関の呼び鈴を鳴らしたが反応がないので奥へ声をかける。こんなときも「ごめんください」が使われるが、やがて現れた主人に勧められて応接室に入るときは「失礼します」、テーブルにお茶を少しこぼしてしまったら「ごめんなさい」、「どうもすみません」などが使われる。そして玄関先での辞去のあいさつ、これが映画の⑩の場面に近いのだが、若い人は「ごめんください」より「失礼します」を多く使うようである。研究室を辞去する学生には「さようなら」ではなく「失礼（いた）します」を使わせたい。（「てんきがいいから さんばをしましょう」の「ごめんなさい」（p. 8）の解説も参照のこと。）

### I-7 タクシーで公園へ（⑪～⑫）

この小場面は映像としての動きが中心で、せりふは、

おばあさん「⑪お願いします。

⑫さあ。」

だけである。

走る必要はないと思うのだが、ちょうど止まっているタクシーが走り出してしまうとでも思ったのか、おばあさんは孫娘の手を引いてタクシーに駆け寄りながら「⑪お願いします。」と声をかける。「お願いします」については⑪すでに触れた。⑫は、おばあさんが孫娘に先に車に乗るよう促すせりふ。

シナリオにはないが、おばあさんは⑪の前に「さあ、さあ」、さらにタクシーに乗り込む際にも「よいしょ」と言っているので、教師は心得ておくといい。

タクシーが走り去った後、画面はそれを見送った女の人のUP。自分も人を待っていることを思い出したのか、ちょっとあたりを見回し、バスケットを取り上げる。先へいって明らかになるが、バスケットの重さから異常に気づき蓋を開ける、という作りである。

## II 公園で (⑤~⑦)

舞台は、桜の咲く新宿御苑へと移る。新宿御苑という語は、すでにIの⑪に出たし、また新宿御苑の桜は、⑩~⑫で話題になった。ただ、桜はIIでの「事件」の背景になっていて、それほど強くはめだたないかも知れない。桜の映像については、「てんきがいいから さんぽをしましょう」も見てほしいところである。また桜の説明については、同映画の解説を参照。新宿御苑については、すでに2.2.2.の冒頭で触れた。

### II-1 女の人が二人の行き先を尋ねる (⑤~⑩)

この小場面は、同じ女性が新宿御苑の正門前でタクシーを降りるところから始まる。駅で会った二人を探しに駅からあわててやってきたことが分かる。女の人は、門の近くにいた係員のところに走り寄り、おばあさんと孫娘について尋ねる。以下はその会話。

女の 人「⑤すみません。

⑥女の子を連れたおばあさんが通りませんでしたか。」

係 員「⑦さあ……。」

女の 人「⑧こんなバスケットを持って——。」

係 員「⑨ああ、その人は、十分くらい前に通りましたよ。」

女の 人「⑩どちらへ行きましたか。」

係 員「⑪あちらの方へ行ったようですよ。」

女の 人「⑫どうもありがとう。」

⑬は、ものを頼んだり質問したりする際に使うある種の呼びかけ語と考えてよい。聞き手の注意を自分に向けさせる働きという点では、「あのう…」や⑦でみた「もしもし」や「ちょっと」などと同じである。

⑭では連体修飾「女の子を連れたおばあさん」に注意させたい。連体修飾についてはすでに⑪で触れたが、この動詞「連れる」は用法が難しいので、ここで深入りする必要はなかろう。

係員は「⑮さあ……。」と言つて、思い当たらない様子。そこで女の人は

「⑯こんなバスケットを持って——。」と説明する。「こんな」は「このような（種類の）」の意で「そんな」「あんな」「どんな」とともに整理されていればよく、品詞が何であるかなどについて特に教えることはないだろう。

⑯は、⑯の「バスケット」でおばあさん（と孫娘）を思い出した係員のせりふ。⑭を受けているせいだろうが、係員は孫娘を問題にせず「その人」と言っている。ここで彼が「その人たち」と言うと多少妙な感じがするのは、「人」が普通「大人」の意で使われるせいだろう。⑯では「その二人」ぐらいが無難だったかもしない。

「その人は」は「その人なら」のほうがより自然だが、この「なら」は「あそこにのぼれば うみが みえます」の学習項目のひとつとなっているので、そちらを参照してほしい。「その人」の「その」が初級の学習者には意外に難しい。その場に物理的に存在しないものや人を指す「指示語」の用法には十分注意させたい。ここでは、「あなたが話題にしている（わたしのよく知らない）その人」というように聞き手の側に属する「人」ととらえているが、話し手、聞き手いずれもがよく知っている人を話題にする場合には「あの人」となることなどを十分に理解させる必要がある。

⑯の「どちら」は「どこ」「どれ」のていねい表現として用いられる場合が多いが、ここでは「どの方向」の意であることに注意させたい。

⑯の問い合わせに対して係員は、ある方向を指し「⑯あちらの方へ行ったようですよ。」と答えるのだが、ここで「ようだ」が使われる。係員は⑯で「ああ、その人……」とはっきり思い出し「十分くらい前に通りましたよ」と明言している以上、ここで「らしい」を使うことはできない。「ようだ」が自分の観察を根拠にした不確かな判断を表すことを再度確認しておきたい。語法について、動詞の過去形につく「ようだ」の例は、すでに〔3〕で示した。

安堵した女性は、感謝の言葉を残して係員に教えられた方向へ走り去る。

場面は変わり公園の中の休憩所。おばあさんと孫娘が休んでいる。そこへ女子店員が串団子と茶を運んでくる。この小場面での会話は以下の通り。

店 員 (串団子と茶を盆にのせて、二人に近づきながら)

「@お待ちどおさまでした。」

(盆を二人の間に置き、頭を下げて)

「@どうもありがとうございました。」

おばあさん「@ああ、どうも……。」

(店員は去る。)

孫 娘「@わあ、おいしそう。」

(と言って、串団子をつまみ一口食べてみて)

「@うん、おいしい。」

おばあさん「@そう。 (一口食べて)

「@おいしい。」

⑥⑦⑧は問題なかろう。⑨の「お待ちどおさま（でした）」は、慣用表現として普通ちょっと人を待たせたときなどによく使われるので覚えさせたい。

⑩で、いわゆる「様態」を表す助動詞「そうだ」が現れる。この映画の中心的指導事項の一つである。「そうだ」は、目の前にあるものについて、その外見の様子が、そうにちがいない、そうなるにちがいない、と感じられる状態であることを表す形式である。この場面では、話し手である少女が、目の前の串団子の形・色・艶などからおいしいにちがいないと感じたことを表している点をまず確認させる必要があるが、学習者の中には、自分の観察を根拠にした判断という点で先に学んだ「ようだ」も使えるのでは、というような鋭い疑問を出す者もあろう。答えはもちろん否だが、串団子を目の前にして「おいしそうですね」が使って「おいしいようですね」が使えない理由としては、「そうだ」がその外見（ここでは形・色・艶など）から受けた直観・印象をストレートに表すのに対し、「ようだ」がより論理的、内省的な思考の結果としての表現である、という違いをはっきりさせておけばよから

う。

語法上の特徴としては、ここで例のように形容詞（形容動詞）の語幹につくほか、動詞の連体形につき、名詞にはつかないことを、伝聞「そうだ」の場合と対比させ明確にしておく必要がある。

- |   |      |
|---|------|
| { [27] おいしそうです  | [様態] |
| { [28] おいしい <u>そ</u> うです。                               | [伝聞] |
| { [29] 雨が降りうそです。  | [様態] |
| { [30] 雨が降 <u>る</u> うそです。                               | [伝聞] |
| [31] あの人は佐藤さん <u>だ</u> うそです。 [伝聞]                       |      |
| [27] や [29] にあたる文を [31] で考えると、様態「そうだ」を使うことはあきらめなければならず、 |      |
| [32] あの人は佐藤さん <u>の</u> うそです。                            |      |

に落ち着く。名詞につかないほか、動詞、形容詞、形容動詞の過去形につかないことも確認させたい。

⑥、⑦は難しくない。④で「わあ、おいしそう」と言いつつ団子を一串つまみ、それを食べてみた少女が、「やっぱり」という気持で「⑥うん」と納得し、「おいしい」と続けるが、「おいしそう」→「おいしい」の切り替えの自然さに注意させるとよい。

この休憩所でのシーンは、⑦のせりふの後一旦中断される。

### II-3 女の人がおばあさんと孫娘を探している

同じ新宿御苑の中の池の畔。画面の上三分の二ほどを覆う桜が美しい。花見客が少ないところをみると、おそらく平日の午後なのだろう。上手から、畔を散歩する一組の男女、そこへ下手から例の女の人が間違えられたバスケットを持って駆けてくる。その男女に、おばあさんと孫娘のことを尋ねているのだろうが、映画では、遠くて何も聞こえないという作りになっている。尋ねられた二人が首を横に振り、尋ねた女性が上手に走り走ることで、結局おばあさんと孫娘の行方はわからなかったのだということが示される。この

シーンは、せりふのないままこれで終わる。

## II-4 バスケットを間違えたことに気付いて休憩所を去る (68~80)

場面は再び休憩所。串団子を食べ終わり、孫娘がお茶を飲もうとするところから始まる。ここでの会話は以下の通りである。

おばあさん「@熱そうだから、気をつけて。」

(茶を一口飲み、盆の上に置こうとして、よそ見をする。茶碗がひっくりかえる。)

孫 娘「@あっ。」

おばあさん「@まあ、まあ。」

(バスケットを開ける。中から、ねこが顔を出す。)

おばあさん「@あっ。」

孫 娘「@ねこ……。」

④どうしたのかしら。」

(おばあさんは考えている。)

孫 娘「@さっきの電話のところで——。」

おばあさん「@ああ、あの人も同じようなかごを持っていたね。」

④どうやら、あの人のかごとまちがえたらしい……。」

孫 娘「@きっとそうよ。」

④どうしましょう。」

おばあさん「@とにかく、ここを出ましょう。」

(おばあさん、孫娘を連れて休憩所を去る。)

おばあさん「@さっ。」

まず「@熱そうだから……」に映画の中心的指導事項の一つ「そうだ」が現れるが、様態を表すこの表現形式については④ (p. 35~36) すでに触れた。この場面では、話し手 (おばあさん) が目の前の茶碗を見て、その湯気の様子などから直観的・印象的に茶が熱いにちがいないと感じたことを表している。ひと息に「……に気をつけて。」と続いている点も、「そうだ」が

「ようだ」のように論理的、内省的思考を経た判断でないことを説明するのに都合がよい。なお「気をつけて」は、すでに⑯で見た。

⑰の「まあ」は驚きを表す感動詞。女性だけが用いることに注意させたい。「まあ、いいでしょう。」や「まあ、おひとついかがですか。」などの「まあ」と区別する必要があるが、学習者から質問が出ない限りここで触ることはなかろう。

⑲「どうしたのかしら。」の「かしら」については、すでに⑲の「いま、何時かしら……。」のところで簡単に触れた。「どうした（のだ）」については、「何が（どうした）」というふうに考えさせるよりも、ひとつの表現として理解させたほうがよからう。すなわち、「どうした」は、話し手が理解できないような事柄や事態に接したときに、その「疑問（不可解）」を表す、バリエーションの多い表現であり、その形式は「疑問」の内容や程度、待遇関係や話し手の性別などによって異なる。以下はその一例である。

[33] どうした。

[34] どうしました(か)。

[35] どうしたのだ。  
(ん)

[36] どうしたのです(か)。  
(ん)

[37] どうしたの。

[38] どうしたのでしょうか。  
(ん)

[39] どうしたのだろう。  
(ん)

[40] どうしたのかな。  
(ん)

⑲ どうしたのかしら。  
(ん)

これらの表現は、必要に応じて適切な場面を与え、具体的な意味（「疑問」の内容）を確認しつつ指導することが望ましい。映画のこの場面で学習者は、孫娘の⑲「どうしたのかしら。」が「どうしてバスケットの中にねこが入っていたのだろう」というような意味であることを理解する必要がある。

やがて孫娘は、バスケットそのものを取り違えたのではないかと考えるようになり、⑲「さっきの電話のところで——。」とつぶやく。「さっき」に

についてはすでに⑪で見たが、ここでの例のような連体修飾の用法も身につけさせたい。ただし指導にあたっては、どのへんまで掘り下げるかを、学習者の学習段階やその他の指導事項とのバランスを考慮して決めるべきである。

[41] 「さっきの人」……「さっき会った人」

「さっき来た人」

「さっき帰った人」

[42] 「さっきの電話」……「さっき使った電話(器)」

「さっきかけた電話」

「さっきかかってきた電話」

こうして見ると、映画のこの場面の「さっきの電話」を正しく言い換えることは、初級の学習者にとってかなり難しいということがわかる。「さっき駅での女の人が（おばあさんの電話番号を調べてくれたとき）使った電話」などと言い換えさせるのは、連体修飾の練習ならともかくここではあまり意味がなかろう。「あの電話」などと同様、指示する事柄が理解できさえすればここでは十分である。

⑯の「ああ、あの人も同じようなかごを持っていたね。」では、「あの人」と「同じような」に注意させたい。指示語「あの」については、⑮の「その人」に対照させてすでに触れた。ここでは、映画の最初のシーンの孫娘のせりふ「③おばあちゃん、あの人も、だれかを待っているようよ。」の「あの」の用法と対比させて、話し手、聞き手の眼前に物理的に存在してはいないが、両者が十分了解している事物を指す用法をはっきり確認させるとよい。中級以上で「例の～」というような表現が使えるようになっているのに、同じ発想の「あの」が使えない学習者も少なくない。映像教材のメリットを生かして初級段階からしっかり身につけさせたいものである。

⑯の「同じようなかご」は「同じかご」というだけの確かさがないためにとられた表現であることを確認しておきたい。ただし、「同じような」の「ような」は、用例を別に幾つか用意すれば学習項目とすることもできる。

なお、先に女の人が⑯で「バスケット」と言ったものを、ここではおばあ

さんが「かご」と言っている。同じ事物を年齢の違いにより別のことばで表現することに注目させるのは、初級の段階では難しいかもしれないが、学習者が自分の母語や日本語について言語学的関心のある場合には、興味のあることだと思う。

次の「<sup>⑯</sup>どうやら、あの人のかごとまちがえたらしい……。」では、「どうやら」に注意させ、「らしい」の意味・用法を確認させたい。「どうやら」は、初級の教科書にないのが普通だが、実は推量判断を表す文を認める際の目印となることがあるという意味で大切な陳述副詞であるので教えておくとよい。

「らしい」については、すでに④ ⑯ ⑬で見た。ここでも「らしい」のかわりに「ようだ」を使って、

<sup>⑯'</sup> どうやら、あの人のかごとまちがえたようだ。  
とすることができる。なお、「らしい」と「ようだ」の違いについては⑨で述べた。

⑯の「きっと」については、すでに⑯で触れた。ここでは、孫娘がおばあさんの推量判断⑯に同意する形になっているが、「きっと」によって、「まちがいなく」や「確かに」や「必ず」ほどではないにしても、自分の意見にかなりの確信があることを表している点を確認させたい。なお、ここで詳しく扱う必要はないが「きっと」「かららず」「ぜひ」などについては、

国広哲彌他 『ことばの意味・3』 (p.186~)

森田良行 『基礎日本語・1』 (p.180~)

日本語教育学会(編) 『日本語教育辞典』 (p.433~)

を参照されたい。

⑯の「どうしましょう。」は、この場合は文字どおり「何をしたらよいか」「どう対処したらよいか」というように考えても意味は通るが、指導にあたっては、⑯の「どうした」の場合と同様具体的な場面を与えつつ、困難な事態に遭遇して困惑したときや途方に暮れたときに用いる慣用的表現として教えたほうが効果的であろう。

⑭では、副詞「とにかく」の意味を映画のこの場面の事実関係から考えさせるとよい。「ここで心配していてもしかたがないから、今は……」とか「私にもいい考えがあるわけではないが、今は……」とか「何を考えるにしても、あの女性はこの公園にはいないのだから……」といったニュアンスがつかめればよい。「とにかく」には別の用法もあるが、ここでは「いろいろ考えるべき問題や事情はあるだろうが、それはさておき、今は……」というような意味での用法だけおさえておけば十分であろう。

基礎の弱い学習者には、「ここを出ましょう」の「を」を確認させ、「大学を卒業する」などの例文で理解を確かにしておくとよい。

⑮の「さっ」は、相手や自分の行動にきっかけを与える感動詞。「さあ」より調子がやや軽く、瞬間性が強いようだ。

おばあさんと孫娘が休憩所を後にしたところで、このシーンが終わる。

## II-5 女の人、二人に会うことができる (⑯～⑰)

画面は同じ苑内。小走りに歩くおばあさんと孫娘が遠くに見える。二人は例の女性が公園に来ていることを知らないのだから、広い苑内を出口へ向かっていると考えられる。

そこへ後ろからその女性が駆けて来て二人に追いつき、一安心というところでこの映画全体が終わるのだが、この最後の小場面での会話は以下の通りである。

女の 人「⑯おばあさん。」

孫 娘「⑯あら。」

女の 人「⑯やっと、見つかったわ。」

おばあさん「⑯どうも、すみません。」

女の 人「⑯いいえ。」

⑯でも、よかったです。」

孫 娘「⑯びっくりしたわ。」

この小場面は、学習者にとっては分かりやすいはずだ。音声（せりふ）が

全く聞こえなくても、その場のだいたいの状況をとらえるのには困らないだろう。ここでは、二、三の点について簡単に触れるにとどめよう。

⑧では「やっと」と「見つかる」に注意させたい。学習者がこの「やっと」で、新宿駅から二人を追って公園にやってきて苑内あちらこちらを探し回った女性の気持を察することができるようなら初級での理解は十分である。また映像教材としての効果があったことになる。

自動詞「見つかる」は、「見つけることができた」の意である。鬼ごっこの場合なら、鬼が「やっと見つけた」と言うのが自然だが、映画のような場合には、話し手の行為（努力）に主眼を置かずに「見つかった」と表現するのが自然である。

最後の「⑨びっくりしたわ。」が、バスケットから子ねこが顔を出したことについてであることは、ストーリーの流れから理解できると思われる。これも映像教材の効果である。しかし、この「びっくりする」という動詞は、ほとんどの初級教科書が「驚く」のずっと後で提出したり全く提出しなかったりしているためか、外国人学習者に理解しにくいようだ。「びっくりする」は「驚く」と比べ、話し言葉に使われることが多く、主觀性が強い、というような点が適切な例文で確認できれば十分である。詳しくは、前出の『基礎日本語・2』（p.72）を参照されたい。

### 3. この映画の学習項目のまとめ

この映画のせりふ中に現れた主な学習項目は以下の通りであった。

- (1) 伝聞の助動詞「そうだ」
- (2) 様態の助動詞「そうだ」
- (3) 推定（不確かな断定）の助動詞「ようだ」・「らしい」
- (4) 疑問の終助詞「かしら」

このうち、サブ・タイトル「伝聞・様態の表現」で示されるのは(1)と(2)であるが、後者の「様態表現」については、必ずしもその意味・用法や言語形

式の種類の扱いが一定していない。それは「様態」という概念が少なからずあいまいで、一方では「推定（不確かな断定）の表現」と、他方では「比況表現」との境界が問題になるからである。

そこでこの章では、とくにこの「様態表現」を中心にその周辺を整理することとし、まず①国文法における「様態表現」の取り扱いを概観し、次に②日本語教育における「様態表現」の取り扱いを調べ、最後に③伝聞「そうだ」、様態「そうだ」、推定（不確かな断定）「ようだ」「らしい」それぞれの意味・用法について簡単なまとめを行うこととした。

なお、比況表現の「ようだ」と派生形容詞を作る接尾辞「らしい」については、「てんきがいいから さんぽをしましょう」の解説（p. 60～62）を参照してほしい。また、(4)の「かしら」については、「おけいこを みに いってもいいですか」の解説のうち、「女性のことば」（p. 33～38）を参照してほしい。

### 3.1. 国文法における「様態表現」の取り扱い

『日本文法大辞典』（1971）には、「様態の助動詞」（吉田金彦執筆）の項に次のような解説がある。

事物・様子などについて、軽く推量し判定する意を表す助動詞。推定の助動詞を含めていうこともある。

そして、現代語としては、「『ようだ』『ふうだ』『らしい』、動詞の連用形につく『そうだ』がある。」と、4種の助動詞を挙げている。

これに対して、『現代語の助詞・助動詞』（1951）では、「そうだ」の第一義を「様態」として、

「～という様子だ。」「今にも～するような様子だ。」などの意味を表わす。

とある。また巻末の索引には、「様子」の項に「そうだ」、「ふうだ」、「ようだ」の3種があるが、「ようだ」の項には、「様子」という語は用いられておらず、「ふうだ」「ようだ」いずれの項にも、とくに「様態」という語は

用いられていない。なお、語彙の中に「様子」という語を含むものとしては、ほかに「らしい」などがある。

神谷聲（1970）によると、国研の『現代語の助詞・助動詞』における上記関連語の扱いは、次の5種の意味・用法にわたってなされているという。

推定=みたいだ・ようだ・らしい

推量=う（だろう・であろう・でしょう）・まい・よう

想像=う・やら・よう・らしい

様子=そうだ・ふうだ・ようだ

類似=ごとき・ふうだ・ようだ・みたいだ・らしい

（下線は、この映画の学習項目として取り上げたもの）

ここから見る限り、様態の「そうだ」は、「推定」の「ようだ・らしい」、「想像」の「らしい」、「様子」の「ようだ」、また、「類似」の「ようだ」、「らしい」等と密接に関連するものであることがわかる。（「推定」と「推量」の区別、そして「様子」と「様態」の概念の差異は明らかではない。）さらに、この映画のせりふの中には出てこないが、様子・類似の「ふうだ」、類似の「みたいだ」も関連語として注意する必要があろう。神谷は、これら関連語を広い意味での「推量表現」（「推量表現の周辺」）として括り、さらに、伝聞を表す「そうだ」や「ということだ」についてもその中に含める扱いをしている。

話し手の推定のしかたにはいろいろある。想像によるもの、様子によるもの、様子から判断するもの、比況や比喩的なものなどである。それらの相互の関連は密接で、区別しがたいところが多々ある。

神谷は、また、「ようだ・そうだ・みたいだ・ふうだ」に関して、形式名詞を伴うこれらの語には次のような用法の区別があるとしている。

形式名詞自体に、状態や様子、比況・比喩などの意味があるので、それから派生して、種々の用法が生じるが、推量的表現のみをあげておく（前の章にもあげてあるが）。

この部分を見ると、神谷が、同じ「ようだ」という語に関して、いわゆ

る「比況・比喩」などの意味と「推量的表現」との二種を区別していることはわかる。しかし、実際に「推量的表現」としてあげた次の4例を見ると、どうもこの二つの意味の区別が判然としない。

[43] どこかで君を見たようだな。

[44] まるで夢の中にいるようです。

[45] 観客は黒山のようであります。

[46] まだ六十才の書生といった人間のきじをむきだしにするところもあるようです。

普通、[43]と[46]はいわゆる「推定表現」、[44]と[45]はいわゆる「比況表現」と見なしうるものであろう。このことからも、神谷が「推量的表現」と称するいわゆる「様態」の表現が、かなり概念規定のあいまいなものであることが納得されよう。

桜井光昭(1972)も、「推量の助動詞」を広義と狭義の二種に分け、主として広義の助動詞について考察している。口語の場合の広義の推量の助動詞としては、

う・よう、まい、らしい、ようだ、みたいだ、そうだ（終止形接続）、そ  
うだ（連用形接続）、ふうだ

の8種を挙げており、「ようだ」以下に関しては、ていねいの意味をふくむ助動詞もあるとしている。

ようです、みたいで、そうで、そうで、ふうで

（いずれも下線は、この映画の学習項目として取り上げたもの）

そして桜井は、これらのうちの5つについて、

「ようだ」「みたいだ」は比況の助動詞、「そうだ（終止形接続）」は伝  
聞（湯沢氏は伝達）の助動詞、「そうだ（連用形接続）」「ふうだ」は様  
態の助動詞と呼ばれることがある。

というように、伝統的な国文法における助動詞の名称を挙げている。さらに、「ようだ」と「みたいだ」については、「不確かな断定と称される用法の場合のみを含めることになる」とし、その中でも次の[47]、[48]のよう

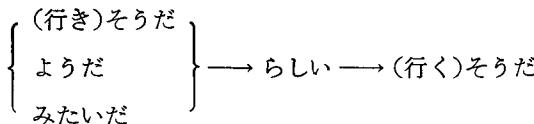
な、「らしい」と言い換えのきくもののみを「推量の助動詞」に含めている。

- [47] 現地はだいぶ寒いようだ。  
[48] 現地はだいぶ寒いみたいた。  
[49] 現地はだいぶ寒いらしい。

しかし、[50]、[51]のような、「菓子を食べたあとの感想のことばとして」発せられる、「らしい」と言い換えのきかないものは「推量の助動詞」に含めないとしている。

- [50] こっちの方がうまいようだ。  
[51] こっちの方がうまいみたいだ。  
\* [52] こっちの方がうまいらしい。

[52]は、実際に食べてみた後の発話としては成立しないものである。桜井は、活用語について、推量形の有無や後続の語の接続形式を検討し、その結果を一覧表にしているが（表そのものは、後に引用する）、これから見る限り、問題の言語形式は、



の順で連続しており、「らしい」は「(行き) そうだ・ようだ・みたいだ」と「(行く) そうだ」の中間に位置していることがわかる。

また、桜井は、通時に広義推量の助動詞を検討した結果を基に、次のような結論を導き出しているが、これは、「推量表現の本質の一面」を示すのみならず、いわゆる「様態表現」の本質を考える上で重要な指摘であるように思われる。

推量の助動詞の消長を見ると、多くの場合、論理的・分析的な表現形式から情意的・融合的なそれへ、客観表現の語から主観表現の語へという方向性が見られる。また、一部には、広義の様態とでもいうべきものからやがて推量の意味を表わすにいたる傾向がいちじるしい。

次に、北原保雄（1972）は、「比況の助動詞」において、「比況」と「不確かな断定（推量）」との関係を論じ、前出の『現代語の助詞・助動詞』から、「ようだ」「みたいだ」「ふうだ」の意味記述を引き、その多くが第一義の「①ある事物が他の事物に似ているという意味を表わす」から意味が派生してきたことを指摘している。しかし、「ようだ」「みたいだ」については、「不確かな、または円曲な断定（時に推定）の意味を表わす」といういわゆる推量判断の意味に注目し、たとえば、「ようだ」を例にとると、「比況の表現」は「主格語の属性表現にあづかるもの」で、「客観的表現に属するもの」であるところから、その文構造が次のように図示されるものであるという。

[53] 今朝の霜は さながら 雪のようだ。  
\_\_\_\_\_ → ← \_\_\_\_\_

[54] あれは まるで あばれ馬に乗っているようだ。  
\_\_\_\_\_ → ← \_\_\_\_\_

これに対して、次の〔55〕、〔56〕のような「不確かな断定（推量判断）の表現」は、「主格語をつついでそれとは直接関係しない」という構文上の差異に注目して、それを以下のように図示している。

[55] （どうも） 私は どこかで君をみた ようだ。  
\_\_\_\_\_ → ← \_\_\_\_\_

[56] 私は かぜをひいた みたいだ。  
\_\_\_\_\_ →

北原はまた、同様の構文上の差異が「らしい」「そうだ」についても認められることを指摘し、次のような例を示している。

[57] あの男は 学生らしい。（属性の表現）

[58] 向こうから来る男は 学生らしい。（推量判断）  
\_\_\_\_\_ →

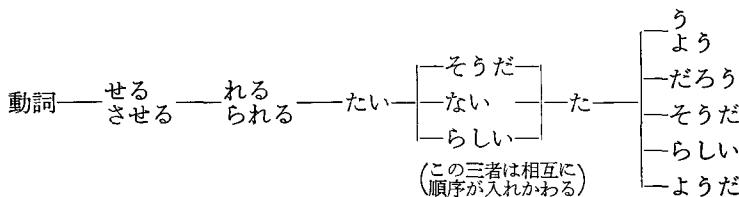
[59] 木が 倒れそうだ。（様態）  
\_\_\_\_\_ →

[60] 木が 倒れる そうだ。（伝聞）  
\_\_\_\_\_ →

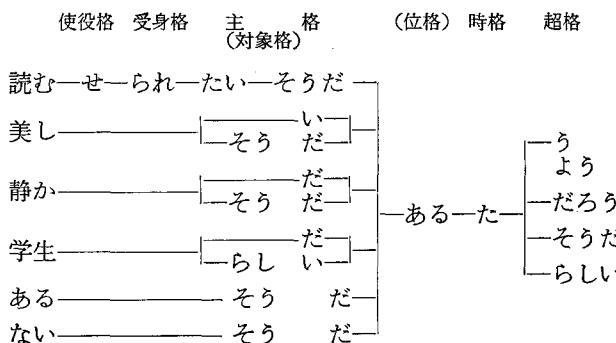
以上の図式をふまえ、北原は、〔57〕の「らしい」（属性概念の表現）を

接尾語, [58] の「らしい」(推量判断) を助動詞とする説に拠り, [59] の「そうだ」(様態) を接尾語, [60] の「そうだ」(伝聞) を助動詞と考えができるとし, [53] [54] [55] [56] の「ようだ」「みたいだ」は(比況も不確かな断定も)すべて、形式体言に接尾語のついたものと見なし得ると述べている。

また、北原(1970)は、助動詞の相互承接の順序として、次のような承接表を掲げている。



北原は、構文論の観点から考察した後、動詞文・形容詞文・形容動詞文・名詞文・位格文(「ある」)の一元的な統一を下図のように整理している。



この図を見て明らかなことは、映画の主な学習項目として扱っている「様態」の「そうだ」が主格に位置するものであるのに対し、「伝聞」の「そうだ」および「推量」の「らしい」は超格に位置するということである。(ここでは、「ようだ」は助動詞として扱われていない。) この図から、二種の「らしい」と「そうだ」の構文論的位置関係の相違が分かるのみならず、前後の言語形式との接続関係がよく分かる。たとえば、同じく主格に位置する

「たい」に「様態」の「そうだ」がつくときは「～たそうだ」となるのに対し、「伝聞」の場合には「～たいそうだ」となり、また、「様態」の「そうだ」は名詞にはつかないが、そのかわり、名詞のみに属性表現の「らしい」が続くことなどの形式上の前後関係がよく分かる。この表は、日本語教育の分野でも、活用方法を工夫するなら、実際の教授活動、教材作成などに関連して言語形式の提出順を検討したりする際、大いに役に立つものと思われる。

北原（1981）は、さらに、助動詞を「それが添加した統叙成分がどのような格の統叙を具備するか」という観点から、以下のように分類した。

せる・させる＝使役格の助動詞

れる・られる＝受身格の助動詞（ただし、主格の用法もある）

たい　　＝主格・対象格の助動詞

ない・そうだ（様態）・らしい（属性）＝主格の助動詞

う・よう・だろう・そうだ（伝聞）・らしい（推定）＝超格の助動詞

（下線は、この映画の学習項目として取り上げたもの）

北原（1970）は、「ようだ」を超格の中に含めているところから、この映画の主な学習項目は、主格および超格の助動詞が中心であるといえよう。ここで、とくに「超格」にかかわる陳述副詞などの扱いが大変重要な問題となってくるのだが、今回はそれに触れる余裕がない。

以上、「様態」が一方では「推量」と、もう一方では「比況」と境界を接しているものであることが明らかになったと思われる。また、「伝聞」も、他から得た情報によるものであり、不確かさという点では広義の「推量」と接点を有しているといえよう。しかし、従来の国文法の領域では、それぞれ別々の意味・用法・活用をもつ助動詞として区別されているだけで、それらの相互関係や相互承接などが問われることはなかった。また、形式上の接続関係などについて言及されることも少なかったようだ。

その一因として、国文法界に「様態」という用語の登場するのが比較的新しいということが指摘されている。風間力三（1964）によれば、「そうだ」

が《様態》の助動詞と呼ばれるようになったのは、他の助動詞に比べてわりあい新しく、橋本文法では、昭和11年の論文「助動詞の分類について」（著作集第二冊、『国語法研究』所収）でこの名称がとられているという。

『口語文法講座6、用語解説篇』（1955）の「十一、付属語、2、助動詞」（岡村和江執筆）では、「(d) 橋本進吉の説」として『国語法研究』の例が引かれ、「一、活用による分類」の「2、形容動詞性の助動詞」4種中に、「伝聞」と並んで「様態」が入れられている。そして、初出は橋本の『国語法要説』（昭9）であるらしい。したがって、その概念規定自体にも解釈の食い違いが生じたり、構文上の処理法に違いがあるのは当然のことであるともいえよう。渡辺実（1964）なども、「様態の助動詞」として、連用形接続の「そうだ」と「ようだ」の二種を取り上げている。

### 3.2. 日本語教育における「様態表現」の取り扱い

日本語教育の領域では、伝聞の「そうだ」、様態の「そうだ」、推量・推定の「ようだ」「らしい」のいずれもが、基本文型（『日本語教育事典』p.267～269、「文型一覧」）の中に含められており、多くの初級教科書で扱われているものであるが、これらが学習者、教授者双方にとって難しい項目のひとつであることは確かなようだ。とりわけ、「だろう」や「かもしれない」と並べて「そうだ」・「ようだ」・「らしい」などの意味の違いを、初級段階の学習者にわかりやすく説くことは、決して容易ではない。

『日本語教育事典』（1982）には、「様態」の意義をもつ助動詞として「そうだ（そうです）」（阪田雪子執筆）があり、その〔意味・用法〕について次の説明がある。

話し手がある事柄について十分にその可能性がある状態だととらえた場合に用いられる。

そして、3種の用法が挙げられている。もちろん、伝聞の「そうだ（そうです）」は別項目である。

また、「ようだ（ようです）」（倉持保男執筆）の〔意味・用法〕の(1)に、

「様態」を表す「ようだ」と呼ばれ、何かがそうとらえられる状態にある意を表す。

とあり、続いて〔意味・用法〕の(2)として、いわゆる「比況」の「ようだ」についての説明がある。

さらに、「みたいだ（みたいです）」（倉持執筆）の〔意味・用法〕の(1)にも、

「様態」を表す「ようだ」に対応する用法。

のあることが指摘されており、「ようだ」との相違は、「日常的なくだけた話し言葉で用いられる」ことにあるとしている。

「らしい」（阪田執筆）に関しては、とくに「様態」という言葉も「推量」という用語も見られないが、次のような〔意味・用法〕についての解説があり、これは、先の「様態」の「そうだ」「ようだ」の規定に、かなり重なっているようだ。

ある事柄について、かなり確信のもてる客観的根拠に基づいて、そうとらえてよい状態である、という話し手の判断を表す。すなわち、話し手が事実だと断定的に言い切ることはできないものの、その場の状況や種々の情報を手がかりにして、事実だと十分に考え得る状態にあると対象をとらえた場合に用いるものである。

次に、『教師用日本語教育ハンドブック④ 文法Ⅱ』（1980）では、「様態を表す言い方」として「そうだ」のみが取り上げられており、先の『日本語教育事典』と同じ規定がなされている。しかし、前書では「様態」とされていた「ようだ」「みたいだ」は、同じ執筆者である倉持保男氏によって、「だろう・でしょう、う・よう、まい、かもしれない、らしい」とともに、「推量・推定・推測などを表す言い方」の中に含められており、「ようだ」について次の規定がある。

ある事柄について、その場の状況や与えられた情報をもとにして、不確実ではあるがそのようにとらえられる状態だという話し手の判断を表すものである。

「みたいだ」についても、意味・用法は「ようだ」とほぼ同じで、「きわめて主観的な判断にもとづく推測を表す」のに用いられるとしている。

このようにみてくると、同一研究者の中においてすら、何を「様態」とするかは揺れ動くものであり、また、これら広義推量表現、あるいは広義様態表現の相違を明らかにする意味記述が、いかに困難かが納得されるであろう。これは、一般的の辞書的定義にもあてはまる。

前述の桜井光昭（1972）には、

右にあげた助動詞（広義の推量助動詞）も、特に外国人に対する日本語教育などの場合は、独立した単語とするよりは、単語の構成要素としたほうが適当なものもある。その場合、体言に接続する助動詞は用言に準ずるものとなる。

という指摘がある。桜井はまた、

表現と理解のためには、品詞とか単語とかから離れて、いわゆる文法的慣用句その他までふくめて、推量表現形式を見直すことが必要であろう。

とも述べているが、これは日本語教育の場でこそ、とくに留意すべき観点であるといえよう。つまり、従来の品詞論の枠内では十分に説明しきれない、やっかいな項目が、この映画で扱う主要学習事項だということになる。

寺村秀夫（1979）は、「ダロウ、マイ、ソウダ、ヨウダ、ラシイおよびそれらに類する語の使い分け」に関して、従来の一般の国文法書での扱い方には、「1) 構文論的な視点」と、「2) このような構文要素のもつている複雑な意味の性格を考え、それを記述する原理を見出していこうとする姿勢」が欠けていたことを指摘し、これらの助動詞を「ムードの助動詞」のうちの「概言的に状況を報道する表現」の助動詞として位置付けている。「報道のムード」の表現というのは、「話し手がある事態、状況についての情報を相手に伝達している」、いわば「報道」の文であるということであり、「命令、要求、意志、意向、感情の直接的表出」などとは区別されるものである。また、「概言」とは、「確言的（‘indicative’）表現」に対峙するもので、「話

し手が、事態を確実な事実としては知らないが、おおむねこうだと思われる、あるいはこうこうだと思わせるような情報がある、という表現」のことであると規定している。つまり、「概言的（‘presumptive’）表現」は、従来の国文法における「推量」「様態」「伝聞」を含めた概念であるというのである。寺村は、従来の「推量」・「様態」・「伝聞」の助動詞が相通する「文法的特性」を有することから、これらを共通のカテゴリーの下位概念として扱うために、「概言」という上位概念を設けているわけである。

寺村は、さらに、個々の「概言的報道の表現」に属する言語形式について、主として意味・用法上の使い分けに関する10項目のテストを行い、その結果を次のような表に整理している。

	確 ダ カ マ (シ) ヨ ラ ソ ワ ノ モ ) 言 ロ シ ゾ ウ シ ウ ケ レ ナ ウ 形 ウ イ イ ダ ダ イ ダ ダ ダ
報道か否か	++ + + + + + + + - -
[1] 直接経験した事実の報道か	+ - - - - - - - -
[2] 自分の推量をmajえた報道か	- + + + + + + -
[3] 既定の事実についての報道か	+ + - - + + +
[4] 未定の事(現在・未来)についてか	+ + + + + + +
[5] 客観的な根拠による推量か	- - - + + +
[6] 眼前の事実だけからの予想か	- - - + - -
[7] 思考を経た推量か	+ + + - + +
[8] 限られた現象から一般的傾向を推量する	- - - - + +
[9] 概言の拠りどころの比重 { 自分の観察 { 他から得た情報	3 2 1 0 0 1 2 3
[10] 推量判断に自分が責任をとる意識	+ -
(それ自体が) 否定になるか 過去になるか 疑問文になるか	+ - - - + - - - + + + - + - + + + - + + + + + - + + + - + +

この表から、この映画の学習項目となっている「(シ) ソウダ、ヨウダ、

ラシイ、ソウダ」が、一連の言語表現の流れの中に位置付けられることが明らかになるであろう。そして、意味上の異同が、下段3段に示される文法的特性に自づと対応していることも注目される。これは、個々の語の「意味的・機能的特性を客観的・統一的に記述する」試みであり、上記4種の言語形式を「概言的報道の表現」として括って扱うことの意義は、今後日本語教育の分野でとくに大きくなると思われる。

ところで、前述の桜井光昭(1972)もまた、活用語17種について、推量形の有無と、後続する語句の可能性の有無を調べ、次のような表にまとめている。

た	まら し い い	ぬ (行 か) い い	な 形容 詞	形 容 詞	形 容 詞	形 容 動 詞	ま あ 一動 般 詞 せれた るが する る さら せれ る		
○	×	×	×	×	○	○	○	○	推量形
○		●●		○○○○○○○○		●●●		○	推量
×						○●○		○	意志
○	×	○○●○○○		(4) ㊤ ㊤ ㊤ (3) (2)		(1) ○ ○		○	だろ接続
(5)	×	○×	○○○○	×	○○○○	×	○ ○	○	たろ接続
(6)	×	○×	○○○○	×	○○○○	×	○ ○	○	ただろ接続
(7)	×	○×	○○○○	×	○○○○○○○○	○ ○	○	○	た接続

備考 ○…「ある」「する」を表わす。

●…○の一種。主として書きことば的な場合。

×…「ない」「しない」を表わす。空欄もこれに準ずる。

—推量形そのものが、「だろ」が接続したものに相当する場合。

表 注 (1) 「だろう」の敬語「でしょう」が接続。

(2) 同語なので接続関係なし。

(3) 「でしょう」自体が「だろう」の敬語になる。

(4) 推量形があれば「一」がはいるところだが、推量形を欠く。

(5) 同語なので接続関係なし。

(6) 同語「た」をふくむので接続関係なし。

(7) 同語なので接続関係なし。

この表でも、先の4種の語の相互連関は明らかである。寺村の、主として意味・用法による一覧表と並べてみると、日本語教育のための分析に示唆するところが多々認められる。日本語教師がこのような分析を十分に心得た上で、種々の言語形式を整理した形で学習者に提示することができれば、この種の項目の指導はずっと効果的なものになるに違いない。

### 3.3. 伝聞の「そうだ」、様態の「そうだ」、推定（不確かな断定）の「ようだ」、「らしい」の意味・用法について

ここでは、主として寺村（1981）の記述を中心に、上記4種の意義・用法上の違いについて簡単に整理しておく。形態・統語上の差異については最小限度触れるにとどめるので、詳細は前出、桜井・寺村の表などを参照していただきたい。

ここで扱う4つの表現形式を、それぞれを含む以下のような例文で確認しておこう。

[61] 雨が降ルソウダ。 ..... 伝聞

[62] 雨が降リソウダ。 ..... 様態

[63] 雨が降ルヨウダ。

}

[64] 雨が降ルラシイ。

..... 推定（不確かな断定）

#### 3.3.1. 伝聞「そうだ」

上に挙げた4種の中で、伝聞の「そうだ」だけは、話し手自身の観察やそれに基づく推測をほとんど含まぬ、客観的な事実の報道である点で異なっている。ただし、普通の断定文と違い、あくまでも「ある事態について、自分

は知らないが、他から伝え聞いたところによるところこうだ、という意味を表す」ものである。話し手が、発話の時点で、他から得た情報が聞き手にとって、何らかの価値を有するものだと判断している表現である。このため、「そうだ」には、同じく伝聞表現とされる「トイウ」と同様、それ自体に過去形、否定形、また、疑問や推量の形がない。

このほか、伝聞を表す言語形式として「トイウコトダ」、「トノコトダ」、「ッテ」等があるが、阪田（1980）は、前二者と「そうだ」の相違を以下のように説明している。

「ということだ」「のことだ」は、一見「そうだ」とほとんどちがいない表現形式のように受けとめられがちだが、「そうだ」が話し手が現に身を置く時点における主体的な判断として他から得た情報内容を述べるのに対し、他からある情報を得たという事実を客観的に伝えようとする点で大きく異なる。

また、「という話だ」「との話だ」もこれに類する表現であるという。

伝聞の「そうだ」は、「すべての用言の現在形、過去形につく」といつても、推量を表す助動詞の「う・よう」や「らしい・ようだ・まい」などには続かないようである。

\* [65] 雨が降ルダロウソウダ。

\* [66] 雨が降ルラシイソウダ。

\* [67] 雨が降ルヨウダソウダ。

\* [68] 雨が降ルマイソウダ。

これに対して、「トイウコトダ」「トノコトダ」は、これらの文に続けて使うことができる。このことからも、伝聞の「そうだ」は、「ダロウ」「ラシイ」「ヨウダ」「マイ」などに並ぶものであり、先に見た広義の推量表現に含められることが納得されよう。阪田（1980）は、「他から得た情報内容を一応正しいものと信じ、そうであるにちがいないとする話し手自身の判断が『そうだ』そのものに含まれている」と説いている。

### 3.3.2. 様態「そうだ」

「雨が降リソウダ」は、寺村（1981）によれば、「話し手が、目の前のある現象、状態を、あることの徵候ととらえ、それを相手に伝える表現」だとされる。つまり、伝聞の場合と異なり、話し手自身が何らかの根拠に基づいて、そういう状態が起こるだろうという予想を下す表現である。あるいは、一つの予感を示すといってもよいものであろう。ただし、予想であるから、「そうだ」の前にくるのは、未来の出来事のみである。「雨が降リソウダ」と言う時点では、まだ実際に降り出してはいないが、曇ってきた空模様などから、間もなくそうなりそうだという徵候を話し手が認めた場合の表現である。そして、動作・出来事の動詞に後接する「そうだ」は、普通、切迫感を伴っている。

これに対して、状態性の動詞や、形容詞、形容動詞につく「そうだ」は、それらの用言で表される判断が、実際に確かめたわけではないので真実そうであるかどうかわからないが、外見に、そうだと考えてよいような徵候があるということを表す。

[69] この家にはお金がたくさんありそうだ。

[70] この串団子、おいしそうですね。

[71] 佐藤さんはいかにも正直そうだ。

また、「そうだ」は名詞にはつかないので、あるものを見て、「～である」ような外観がある、ということを表現したいときは、次のように代わりに「ようだ」を使う。

\*[72] どうやら、あの二人は兄弟そうだ。

[73] どうやら、あの二人は兄弟であるようだ。

[74] どうやら、あの二人は兄弟のようだ。

様態の「そうだ」は、推量がなされた時点によって、過去の形もある。

[75] きのうは、今にも雪が降りそうでした。

しかし、現在の状況にかかわりなく単に未来のことについて述べる形は見られない。

\*[76] 明日は、雨が降りそうでしょう。

\*[77] 来年は、試験に受かりそうだろう。

また、様態の「そうだ」には、疑問・否定などを表す語形式もある。

[78] そちらも雨が降りそうですか。

[79] 雨はいっこうに降りそうにない。

[80] 雨はすぐには降らなそうです。

[81] 雨は降りそうにもない。

[82] 雨は降りそうもありません。

[83] 雨はそれほどひどくなさそうだ。

様態の「そうだ」と伝聞の「そうだ」の相違は、接続法の上で明らかではあるが、日野資純（1975）は、例文に下線部分を補うことによって、二つの「そうだ」の意味特徴をより明確にしている。

[84] この空模様では、どうやら雨が降りそうだ。

[85] 天気予報によれば、夕方から雨が降るそうだ。

日野はさらに、「伝聞の『そうだ』は、予想をあらわす『そうだ』とは違って、『そうだ』の部分の独立性が強い」と指摘し、

。雨が 降りそう——だ。

。雨が 降る——そうだ。

という分析の正当性を主張している。

### 3.3.3. 推定（不確かな断定）「ようだ」

次に、「雨ガ降ルヨウダ」の「ようだ」を、寺村（1981）は、「本当はどうか分からぬが」「そうであると思わせるような外観、様子、状況がある」という話し手の印象、それによる推測を述べる言い方」として規定している。つまり、推量している今は降っていないが、おそらくやがて降り出すかもしれないという事態を予測する表現だということが分かる。

しかし、「ようだ」には、「そうだ」のような切迫感はない。次の例で

[86] しか成立しないのは、この切迫感の有無によるものであろう。

[86] あっ、財布がポケットから落ちそうですよ。

\*[87] あっ、財布がポケットから落ちるようですよ。

また、寺村は、「そうだ」は「予感」を表し、「ようだ」は「予測」を表すと述べている。たとえば、次の二つの例で、

[88] 誰カガ来ソウダ。

[89] 誰カガ来ルヨウダ。

[89] の「来ルヨウダ」は、廊下に足音がするとか、咳ばらいや犬の声が聞こえたとかいった現象から、次に起こる出来事を「予測」するのに対し、

[88] の「来ソウダ」は、音や人影など、そう推測させる現象があるわけではないが、話し手がただそう直感する、何となくそんな「予感」がする、というときの表現だという。そして、「そうだ」は「より直観、描写的」であり、「ようだ」は「より思考、内省的」であると指摘している。

阪田（1980）にも、同様の指摘がある。

[90] あのお菓子はおいしそうだ。

[91] あのお菓子はおいしいようだ。

という二つの文の違いについて、前者が「直感的な印象を表す」のに対し、後者は「かなり明確な根拠にもとづいた予測を表す」ものだと述べ、

「ようだ」がある事柄の実現を予測することにねらいがあるのに対し、「そうだ」はある事柄が予測されるものとして、その場の状況をとらえることに表現の重点がある。このことは、お菓子を目の前にして、「まあ、おいしそうなお菓子」とは言えても、「まあ、おいしいようなお菓子」とは言えないことからもうかがえる。

と説き、さらに、動詞、形容詞の過去形に「ようだ」がつき、「そうだ」がつかないことに関連して、

「あの人は若いころ、大分お金に困ったようだ。」「飛行機事故でまた、大せいの人が死んだようだ。」のように、すでにある結果が現れていることを「～たようだ」と推測する用法に対応する形式が「そうだ」にはないことも、「そうだ」は結果を予測する形で現状をとらえるものであることを示すものである。

と説明している。

寺村はまた、「動詞+ヨウダ」が「確信はできないが、外観、状況その他これまで見たことから推しはかかる、一般にそういう傾向があると自分は思う」というときにも使われることを指摘し、その例として「雨が降ルヨウダ」を「雨が降リソウダ」と比較し、「ようだ」は、眼前にそういう情景があるというよりも、

[92] コノ時季ニハ日本海側ノ方ガヨク雨ガ降ルヨウダ。

[93] アアイウタ焼ケノアクリ日ニハ大低雨ガ降ルヨウデス。

のような用法のほうが多いことを指摘している。

### 3.3.4. 推定（不確かな断定）「らしい」

「らしい」は、最初の「そうだ」（伝聞）と近い面を持つ助動詞である。「雨が降ルラシイ」というのは、おそらく他の人から聞いた情報によって話し手が推測したもので、この点で、伝聞の「そうだ」と重なる面が多い。両者の違いは、<「そうだ」が100%他から得た情報を伝える気持で使われるのに対し、「らしい」のほうは幾分かは自分の観察による推測もまざっているという点>である。

また、「ようだ」との相違は、同じように不確かな断定であっても、「ようだ」のほうが自分の観察、推測の比重が大きく、「らしい」のほうが他から得た情報の比重が大きい。

森田良行（1980）も、「ようだ」と「らしい」の違いについて、ほぼ同様の点を指摘している。

「ようだ」は自身のその場での直感的な感覚による印象で、不確かさを残した言い方である。「らしい」は根拠にもとづいたかなり確実性のある推量の言い方である。

ただし、「らしい」と「ようだ」では入れ替え可能な文も少なくないという。

「ようだ」が、自身のそのときの感覚にもとづく直感的な判断であるのに対し、「らしい」は外在する情報を手がかりとしたかなり客観的な推量判断であるため、両者で差の見られる場合も出てくる。

この「ようだ」と「らしい」の差異について、『ことばの意味・3』(1982)の「ヨウダ・ラシイ・ダロウ」の項(柴田武執筆)では、「ようだ」のほうが「らしい」よりも、<事態と話者との心理的距離が近い>といつており、「ヨウダのほうがラシイよりも<根拠の確実性が高い>」といっているが、これは先の森田の説に反するものである。

この「根拠の確実性」の高低は簡単に決ることはできない。推量としての判断の直感性や、根拠となる材料の信頼性などは、一対の短文の比較では不十分であり、一定の長さの文脈に沿った、緻密な検討を行ってはじめて決めることができるようと思われる。また、「ようだ」「らしい」については、その「婉曲」としての用法が大切であり、その用例の分析にはやはり、十分な長さの文脈が必要であろう。柏岡珠子(1980)は、この「婉曲」と「推量」の違いを明らかにした上で、「ようだ」と「らしい」の差異について考察している。

以上、4種の広義「推量」表現について見てきた。日本語教育の分野で、これらの言語形式の意味特性による使い分けを指導するためには、外国人習習者に「推量」の根拠となる情報が、<話し手自身の観察によって得たもの>か<話し手が他から手に入れたもの>かについての相対的比率を、それぞれの言語形式ごとに理解させることが不可欠である。寺村(1981)は、上級日本語習習者に、次のような表を提供している。(なお、これは先に紹介した寺村(1979)の中の一覧表の一部である。)

推測の根拠が	(シ)ソウダ	ヨウダ	ラシイ	(スル)ソウダ
自分の観察による	3	2	1	0
他から得た情報による	0	1	2	3

さらに、寺村は次のような説明を加えている。

自分の観察、推測による比率が大きいということは、その推測についての責任を自分がとるという意識があることを意味し、逆に、他からの情

報による推測だということは、その推測についての責任を避けようという意識が働いているといえる。

#### 4. 参考文献

- 風間力三 1964 「『死にそうだ』と『死ぬようだ』」(『口語文法講座3』) 明治書院
- 柏岡珠子 1980 「ヨウダとラシイに関する一考察」『日本語教育』第41号
- 神谷 馨 1970 「現代における推量表現」『月刊文法』昭和45年6月号 明治書院
- 北原保雄 1970 「助動詞の相互承接についての構文論的考察」『論集日本語研究7 助動詞』 有精堂
- 1972 「比況の助動詞」『品詞別日本文法講座 助動詞Ⅱ』 明治書院
- 1981 『日本語助動詞の研究』 大修館
- 国立国語研究所 1951 『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』 秀英出版
- 国廣哲彌他 1980 『ことばの意味・3』 平凡社
- 阪田雪子・倉持保男 1980 『教師用日本語教育ハンドブック④ 文法Ⅱ』 国際交流基金
- 桜井光昭 1972 「推量の助動詞」『品詞別日本文法講座 助動詞Ⅰ』 明治書院
- 寺村秀夫 1979 「ムードの形式と意味(1)——概言的報道の表現——」『文芸言語研究 言語篇4』 筑波大学文芸・言語学系
- 1981 『上級文法教本 第4分冊』 三友社
- 日本語教育学会 1982 『日本語教育事典』 大修館
- 日野資純 1975 「『雨が降りそうだ』と『雨が降るそうだ』」『新・日本語講座2 日本文法の見えてくる本』 汐文社
- 松村明・編 1969 『古典語現代語助詞助動詞詳説』 学燈社
- 1971 『日本文法大辞典』 明治書院
- 森岡健二他・編 1965 『口語文法講座6 用語解説編』 明治書院

- 森田良行 1980 『基礎日本語 2』 角川書店
- 吉田金彦 1971 『現代語助動詞の史的研究』 明治書院
- 渡辺 実 1964 「よさそうだ・なさそうだ」 『口語文法講座 3』 明治書院

# 資 料

## 資料1. 使用語彙一覧

これは、この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文同様、教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
  - 2.―1. 接頭辞「お」や、接尾辞「さん」「じ(時)」「ふん(分)」は、見出し語として取り上げている。ただし「おばあさん」や、「おばさん」等は、そのまま見出し語に立てている。
  - 2.―2. 数詞は、助数詞と切り離して見出し語に立てている。
  - 2.―3. 動詞は、終止形を見出し語にしている。
  - 2.―4. 「ない」は、見出し語にしている。
  - 2.―5. 形容動詞は、「\_\_\_な」の形を見出し語にしている。
  - 2.―6. 「です」に前接する「ん」や、「名詞+なんです」の「なん」は、一語扱いにして見出し語にしている。
  - 2.―7. 「おねがいします」等、慣用的表現とした扱ったものや、「気をつける」等、熟語的表現として扱ったものは、そのまま見出し語にしている。
  - 2.―8. 助動詞「た」や接続助詞「て」は、ここでは動詞部分に含め見出し語にしていない。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
  - 3.―1. 「ふん(分)」等、数詞によって助数詞の発音が異なる場合は下位分類した。
  - 3.―2. 動詞は、まず本動詞としての用法と補助動詞としての用法で大

きく二分した。本動詞の場合は、「ます」形であるか、「——て」等の形であるかで下位分類し、補助動詞、助動詞等が違えばさらに下位分類してある。また常体での言い方は、一語扱いにして別の分類にした。補助動詞の意味・用法の違いによる下位分類はしていない。

- 3.—3. 「です」は、それに伴う終助詞の種類、また「です」に「ん」「なん」が前接するかどうかにより下位分類してある。
- 3.—4. 「だ」は後接する要素で下位分類してある。
- 3.—5. 「そうだ」(伝聞・様態)は、その意味、用法により下位分類してある。
- 3.—6. 助詞「か」「が」「で」「に」「ね」「の」等は、その意味、用法によって下位分類してある。
4. 「ます」「ました」「ませんでした」については文例の列挙を省略し、文番号だけを示した。「ましょう」は省略していない。
5. 使用文例の文頭には、①②……の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では、この順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にも、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については通し番号を横に並べ、引用を一回ですませた。
6. 見出し語の横には〔 〕で当用漢字の範囲内で漢字を示し、またその横には( )で語の使用回数を示した。

ああ(4)

- ④② ああ、いまさくらがきれいだそうですね。  
⑤⑦ ああ、そのひとは、じっ�んくらいまえにとおりましたよ。  
⑥③ ああ、どうも……。  
⑦⑥ ああ、あのひともおなじようななかごをもっていたね。

あちら(1)

- ⑤⑨ あちらのほうへいったようですよ。

あっ(2)

- ⑥⑨⑦ あっ。

あつい [熱い] (1)

- ⑥⑧ あつそうだから、きをつけて——。

あと [後] (1)

- ③⑨ きっと、あとからくるわよ。

あの(3)

- ③ おばあちゃん、あのひとも、だれかをまっているようよ。  
⑤⑥ ああ、あのひともおなじようななかごをもっていたね。  
⑦⑥ どうやら、あのひとのかごとまちがえたらしい……。

あら(1)

- ④② あら。

ありがとう(3)

- ④④ どうも、いろいろありがとうございます。  
⑥⑥ どうもありがとうございます。  
⑥② ありがとうございました。

あんない [案内] (1)

- ⑧⑯ じゃあ、ばんごうあんないにききましたか。

いい(1)

- ⑬⑯ でんわをしてみたほうがいいですよ。

いいえ(2)

④⑤ いいえ。

いく [行く] (4)

(1) ⑦ わたしたちだけで、さきにいきましょうよ。

⑥ どちらへいきましたか。

(2) ⑨ あちらのほうへいったようですよ。

(3) ⑩ おじょうさん、どこへいくんですか。

いま [今] (3)

② いま、なんじかしら……。

⑦ もしもし、すみませんが、いま、なんじでしょうか。

④ ああ、いまさくらがきれいだそうですね。

いる(4)

(1) ⑫ もうさんじっ�んもすぎていますね。

(2) ③ おばあちゃん、あのひとも、だれかをまっているようよ。

(3) ⑩ ええ、しりあいをまっているんです。

(4) ⑦ ああ、あのひともおなじようななかごをもっていたね。

いれる [入れる] (1)

⑭ でんわばんごうをかいたかみをたしかにここにいれたんですがね。

いろいろ(1)

④ どうも、いろいろありがとうございました。

うん(1)

⑥ うん、おいしい。

ええ(2)

⑩ ええ、しりあいをまっているんです。

⑯ ええ……。

お(1)

⑨ だれかをおまちのようですが——。

おいしい(3)

(1) ⑥ うん、おいしい。

⑥⑦ おいしい。

(2)⑥④ わあ、おいしい。

おしえる〔教える〕(1)

②⑨ なまえとじゅうしょをおしえてください。

おじょうさん〔お嬢さん〕(1)

⑩ おじょうさん、どこへいくんですか。

おそい〔遅い〕(1)

① おばあちゃん、おばさんは、おそいわね。

おとす〔落とす〕(1)

⑯ おとしたらしいんですよ。

おなじ〔同じ〕(1)

⑦ ああ、あのひともおなじようななかごをもっていたね。

おねがいします〔お願いします〕(2)

㉑㉒ おねがいします。

おばあさん(2)

⑤ おんなのこをつれたおばあさんがとおりませんでしたか。

⑧ おばあさん。

おばあちゃん(2)

① おばあちゃん、おばさんは、おそいわね。

③ おばあちゃん、あのひとも、だれかをまっているようよ。

おばさん(1)

① おばあちゃん、おばさんは、おそいわね。

おまちどおさまでした〔お待ちどおさまでした〕(1)

㉑ おまちどおさまでした。

おんなのこ〔女の子〕(1)

④ おんなのこをつれたおばあさんがとおりませんでしたか。

か(10)

(1)⑦ もしもし、すみませんが、いま、なんじでしょうか。

- ⑯ でんわちょうをみましょうか。  
⑯ じゃあ、ばんごうあんないにきましたか。  
⑯ わたしがききましょうか。  
⑯ おじょうさん、どこへいくんですか。  
⑯ おんなのこをつれたおばあさんがとおりませんでしたか。  
⑯ どちらへいきましたか。

(2)⑯⑯ そうですか。

(3)⑯ そのひとのごしゅじんかむすこさんのなまえは?

が(10)

- (1)⑯ わたしが、ききましょうか。  
⑯ それが……、わからないんです……。  
⑯ ああ、いまさくらがきれいだそうですね。  
⑯ おんなのこをつれたおばあさんがとおりませんでしたか。  
(2)⑯ でんわをしてみたほうがいいですよ。  
(3)⑦ もしもし、すみませんが、いま、なんじでしょうか。  
⑨ だれかをおまちのようですが——。  
⑪ じゅういちじにくるはずなんですが……。  
⑯ でんわばんごうをかいだかみをたしかにここにいれたんですがね。  
⑯ さっきみたんですが、わかりませんでした。

かく [書く] (1)

⑯ でんわばんごうをかいだかみをたしかにここにいれたんですがね。

かご(2)

- ⑯ ああ、あのひともおなじようなかごをもっていたね。  
⑯ どうやら、あのひとのかごとまちがえたらしい……。

かしら(2)

- ② いま、なんじかしら……。  
⑯ どうしたのかしら。

かみ [紙] (1)

⑭ でんわばんごうをかいだかみをたしかにここにいれたんですがね。

から(2)

(1)⑯ きっと、あとからくるわよ。

(2)⑯ あつそうだから、きをつけて——。

きく [聞く] (3)

(1)⑯ じゃあ、ばんごうあんないにきましたか。

⑯ わたしが、ききましょうか。

(2)⑤ ちょっと、きいてみましょうよ。

きっと(2)

⑯ きっと、あとからくるわよ。

⑯ きっとそうよ。

ぎょえん [御苑] (1)

⑪ しんじゅくぎょえんです。

きれいな(1)

⑯ ああ、いまさくらがきれいだそうですね。

きをつけて [気をつけて] (2)

⑯ どうぞきをつけて——。

⑯ あつそうだから、きをつけて——。

ください [下さい] (1)

⑯ なまえとじゅうしょうをおしえてください。

くらい(1)

⑯ ああ、そのひとは、じっ�んくらいまえにとおりましたよ。

くる [来る] (2)

(1)⑯ きっと、あとからくるわよ。

(2)⑪ じゅういちじにくるはずなんですが……。

ここ(2)

⑭ でんわばんごうをかいだかみをたしかにここにいれたんですがね。

⑯ とにかく、ここをでましょう。

ございました(2)

④④ どうも、いろいろありがとうございました。

⑥② ありがとうございました。

ごしゅじん [御主人] (1)

⑩⑩ そのひとのごしゅじんかむすこさんのなまえは？

ごめんください(1)

⑤⑤ ごめんください。

こんな(1)

⑤⑥ こんなバスケットをもって——。

さあ(2)

⑤② さあ。

⑤⑤ さあ……。

さきに [先に] (1)

⑦⑦ わたしたちだけで、さきにいきましょうよ。

さくら [桜] (1)

④④ ああ、いまさくらがきれいだそうですね。

さっ(1)

⑩⑩ さっ。

さっき(2)

⑦⑦ さっきみたんですが、わかりませんでした。

⑦⑦ さっきのでんわのところで——。

さとう(2)

②③⑥ なまえは、さとうはな。

さようなら(3)

④⑦⑧⑨ さようなら。

さん(1)

⑩⑩ そのひとのごしゅじんかむすこさんのなまえは？

さんじゅう [三十] (1)

⑫ もうさんじっぶんもすぎていますね。

じ [時] (4)

② いま、なんじかしら……。

⑦ もしもし、すみませんが、いま、なんじでしょうか。

⑧ じゅういちじはんですよ。

⑪ じゅういちじにくるはずなんですが……。

じゃあ(1)

⑯ じゃあ、ばんごうあんないにききましたか。

じゅう [十] (1)

⑤ ああ、そのひとは、じっぶんくらいまえにとおりましたよ。

じゅういち [十一] (2)

⑧ じゅういちじはんですよ。

⑪ じゅういちじにくるはずなんですが……。

じゅうしょ [住所] (3)

㉒ なまえとじゅうしょをおしえてください。

㉔ じゅうしょは、せたがやのほうです。

㉗ じゅうしょは、せたがやだそうです。

しりあい [知り合い] (1)

⑩ ええ、しりあいをまっているんです。

しんじゅく [新宿] (1)

㉑ しんじゅくぎょえんです。

すぎる [過ぎる] (1)

㉑ もうさんじっぶんもすぎていますね。

すみません(5)

⑦ もしもし、すみませんが、いま、なんじでしょうか。

㉕㉖ すみません。

㉗㉘ どうもすみません。

する(3)

- (1)㉙ どうしましょう。  
(2)㉚ でんわをしてみたほうがいいですよ。  
(3)㉛ どうしたのかしら。

せたがや [世田谷] (2)

- ㉛ じゅうしょは、せたがやのほうです。  
㉜ じゅうしょは、せたがやだそうです。

そう(8)

- ④ そうらしいね。  
⑥ そうだね。  
㉙㉚ そうですか。  
㉘ そうね……。  
㉛ そうらしいですか。  
㉜ そう？  
㉜ きっとそうよ。

そうだ(3)

- (1)㉛ じゅうしょは、せたがやだそうです。  
㉛ ああ、いまさくらがきれいだそうですね。  
㉜ わからないそうです。  
(2)㉛ わあ、おいしそう。  
㉘ あつそだから、きをつけて——。

その(2)

- ㉘ そのひとのごしゅじんかむすこさんのなまえは？  
㉜ ああ、そのひとは、じつぶんくらいまえにとおりましたよ。

それ(1)

- ㉛ それが……、わからないんです……。

だ(3)

- (1)⑥ そうだね。  
(2)㉘ あつそだから、きをつけて——。

(3)㉗ じゅうしょは、せたがやだそうです。

だけ(1)

㉘ わたしたちだけで、さきにいきましょうよ。

たしかな [確かな] (1)

㉙ でんわばんごうをかいたかみをたしかにここにいれたんですがね。

たち(1)

㉚ わたしたちだけで、さきにいきましょうよ。

だめな(1)

㉛ だめですね。

だれか(2)

㉜ おばあちゃん、あのひとも、だれかをまっているようよ。

㉝ だれかをおまちのようですが——。

ちょっと(1)

㉞ ちょっと、きいてみましょうよ。

つれる [連れる] (1)

㉟ おんなのこをつれたおばあさんがとおりませんでしたか。

で(2)

(1)㉛ さっきのでんわのところで——。

(2)㉗ わたしたちだけで、さきにいきましょうよ。

でしよう(1)

㉚ もしもし、すみませんが、いま、なんじでしょうか。

です(20)

(1)㉗ じゅうしょは、せたがやのほうです。

㉛ しんじゅくぎょえんです。

(2)㉙㉘ そうですか。

(3)㉛ だめですね。

(4)㉘ じゅういちじはんですよ。

㉚ でんわをしてみたほうがいいですよ。

(5)㉗ じゅうしょは、せたがやだそうです。

㉙ わからないそうです。

㉛ ああ、いまさくらがきれいだそうですね。

(6)㉙ だれかをおまちのようですが——。

㉚ あちらのほうへいったようですよ。

(7)㉚ そちらしいですね。

(8)㉚ ええ、しりあいをまっているんです。

㉛ でんわばんごうをかいだかみをたしかにここにいれたんですがね。

㉚ おとしたらしいんですよ。

㉛ さっきみたんですが、わかりませんでした。

㉛ それが……、わからないです……。

㉛ おじょうさん、どこへいくんですか。

(9)㉛ じゅういちじにくるはずなんですが……。

でも(1)

㉙ でも、よかった——。

てる [出る] (1)

㉙ とにかく、ここをでましょう。

でんわ [電話] (3)

(1)㉛ さっきのでんわのところで——。

(2)㉛ でんわばんごうをかいだかみをたしかにここにいれたんですがね。

(3)㉛ でんわをしてみたほうがいいですよ。

でんわちょう [電話帳] (1)

㉛ でんわちょうをみましょうか。

と(2)

(1)㉛ なまえとじゅうしょをおしえてください。

(2)㉛ どうやら、あのひとのかごとまちがえたらしい……。

どう(2)

㉛ どうしたのかしら。

⑦⑧ どうしましょう。

どうぞ(1)

④⑥ どうぞきをつけて——。

どうも(6)

④④ どうも……。

③④④ どうもすみません。

④④ どうも、いろいろありがとうございました。

⑥⑥ どうもありがとうございます。

③③ ああ、どうも……。

どうやら(1)

⑦⑦ どうやら、あのひとのかごとまちがえたらしい……。

とおる [通る] (2)

⑤④ おんなのこをつれたおばあさんがとおりませんでしたか。

⑤⑦ ああ、そのひとは、じっ�んくらいまえにとおりましたよ。

どこ(1)

④⑩ おじょうさん、どこへいくんですか。

ところ [所] (1)

⑦④ さっきのでんわのところで——。

どちら(1)

⑤⑧ どちらへいきましたか。

とにかく(1)

⑦⑨ とにかく、ここをでましょう。

ない(2)

③① それが……、わからないんです……。

③② わからないそうです。

なまえ [名前] (4)

②② なまえとじゅうしょをおしえてください。

②③⑥ なまえは、さとうはな。

㉙ そのひとのごしゅ じんかむすこさんのなまえは？

なに [何] (2)

② いま、なんじかしら。

⑦ もしもし、すみませんが、いま、なんじでしょうか。

なん(1)

⑪ じゅういちじにくるはずなんですが……。

に(4)

(1)⑪ じゅういちじにくるはずなんですが……。

⑤ ああ、そのひとは、じっぷんくらいまえにとおりましたよ。

(2)⑭ でんわばんごうをかいたかみをたしかにここにいれたんですがね。

(3)⑯ じゃあ、ばんごうあんないにききましたか。

ね(10)

(1)① おばあちゃん、おばさんは、おそいわね。

④ そららしいね。

⑥ そうだね。

⑫ もうさんじっぷんもすぎていますね。

⑭ でんわばんごうをかいたかみをたしかにここにいれたんですがね。

⑯ だめですね。

⑭ ああ、いまさくらがきれいだそうですね。

⑯ そららしいですね。

⑮ ああ、あのひともおなじようなかごをもっていたね。

(2)㉙ そうね……。

ねこ(1)

㉙ ねこ……。

の(8)

(1)㉙ じゅうしょは、せたがやのほうです。

㉙ そのひとのごしゅ じんかむすこさんのなまえは？

㉙ そのひとのごしゅ じんかむすこさんのなまえは？

⑤⁹ あちらのほうへいったようですよ。

⑦⁴ さっきのでんわのところで——。

⑦⁶ どうやら、あのひとのかごとまちがえたらしい……。

(2)⑨ だれかおまちのようですが——。

(3)⑦³ どうしたのかしら。

は(7)

① おばあちゃん、おばさんは、おそいわね。

㉓㉖ なまえは、さとうはな。

㉔ じゅうしょは、せたがやのほうです。

㉗ じゅうしょは、せたがやだそうです。

㉙ そのひとのごしゅじんかむすこさんのなまえは？

㉗ ああ、そのひとは、じっ�んくらいまえにとおりましたよ。

はい(1)

㉙ はい。

はず(1)

㉑ じゅういちじにくるはずなんですが……。

バスケット(1)

㉖ こんなバスケットをもって——。

はな(2)

㉓㉖ なまえは、さとうはな。

はん [半] (1)

㉘ じゅういちじはんですよ。

ばんごう [番号] (2)

(1)㉑ じゃあ、ばんごうあんないにきましたか。

(2)㉔ でんわばんごうをかいたかみをたしかにここにいれたんですがね。

びっくりする(1)

㉗ びっくりしたわ。

ひと [人] (5)

- ③ おばあちゃん、あのひとも、だれかをまっているようよ。
- ⑩ そのひとのごしゅじんかむすこさんのなまえは？
- ⑤ ああ、そのひとは、じつぶんくらいまえにとおりましたよ。
- ⑦ ああ、あのひともおなじようななかごをもっていたね。
- ⑨ どうやら、あのひとのかごとまちがえたらしい……。

ふん [分] (2)

- ⑫ もうさんじつぶんもすぎていますね。
- ⑤ ああ、そのひとは、じつぶんくらいまえにとおりましたよ。

へ(3)

- ④ おじょうさん、どこへいくんですか。
- ⑥ どちらへいきましたか。
- ⑨ あちらのほうへいったようですよ。

ほう [方] (3)

- (1)④ じゅうしょは、せたがやのほうです。
- ⑨ あちらのほうへいったようですよ。
- (2)⑩ でんわをしてみたほうがいいですよ。

まあ(2)

- ⑦ まあ、まあ。
- ⑦ まあ、まあ。

まえ [前] (1)

- ⑤ ああ、そのひとは、じつぶんくらいまえにとおりましたよ。
- ました(3)

- ⑧, ⑨, ⑩

ましょう(6)

- ⑤ ちょっと、きいてみましょうよ。
- ⑯ でんわちょうをみましょうか。
- ⑩ わたしが、ききましょうか。
- ⑦ わたしたちだけで、さきにいきましょうよ。

⑦⑧ どうしましょう。

⑨ とにかく、ここをでましょう。

ます(1)

⑩

ませんでした(2)

⑪, ⑫

まちがえる [間違える] (1)

⑬ どうやら、あのひとのかごとまちがえたらしい……。

まつ [待つ] (3)

(1)⑨ だれかをおまちのようですが——。

(2)③ おばあちゃん、あのひとも、だれかをまっているようよ。

⑩ ええ、しりあいをまっているんです。

みつかる [見つかる] (1)

⑪ やっと、みつかったわ。

みる [見る] (4)

(1)⑯ でんわちょうをみましょうか。

(2)⑦ さっきみたんですが、わかりませんでした。

(3)⑤ ちょっと、きいてみましょうよ。

(4)⑬ でんわをしてみたほうがいいですよ。

むすこ [息子] (1)

⑩ そのひとのごしゅじんかむすこさんのなまえは？

も(3)

(1)③ おばあちゃん、あのひとも、だれかをまっているようよ。

⑦ ああ、あのひともおなじようなかごをもっていたね。

(2)⑫ もうさんじっ�んもすぎていますね。

もう(1)

⑫ もうさんじっ�んもすぎていますね。

もしもし(1)

⑦ もしもし、すみませんが、いま、なんじでしょうか。

もつ [持つ] (2)

(1)⑯ こんなバスケットをもって——。

(2)⑯ ああ、あのひともおなじようなかごをもっていたね。

やっと(1)

⑬ やっと、みつかったわ。

よ(10)

③ おばあちゃん、あのひとも、だれかをまっているようよ。

⑤ ちょっと、きいてみましょうよ。

⑧ じゅういちじはんですよ。

⑬ でんわをしてみたほうがいいですよ。

⑯ おとしたらいいんですよ。

⑰ わたしたちだけで、さきにいきましょうよ。

⑯ きっと、あとからくるわよ。

⑯ ああ、そのひとは、じっ�んくらいまえにとおりましたよ。

⑯ あちらのほうへいったようですよ。

⑰ きっとそうよ。

よい [良い] (1)

⑯ でも、よかった——。

ようだ(4)

(1)⑨ だれかをおまちのようですが——。

(2)③ おばあちゃん、あのひとも、だれかをまっているようよ。

⑯ あちらのほうへいったようですよ。

(3)⑯ ああ、あのひともおなじようなかごをもっていたね。

らしい(4)

(1)⑯ おとしたらいいんですよ。

⑰ どうやら、あのひとのかごとまちがえたらしい……。

(2)④ そうらしいね。

④③ そうらしいですね。

わ(4)

① おばあちゃん、おばさんは、おそいわね。

③③ きっと、あとからくるわよ。

③③ やっと、みつかったわ。

⑦ びっくりしたわ。

わあ(1)

④④ わあ、おいしそう。

わかる [分かる] (3)

(1)⑦ さっきみたんですが、わかりませんでした。

(2)⑥ それが……、わからないんです……。

③③ わからないそうです。

わたし [私] (2)

②② わたしが、ききましょうか。

⑦ たわしたちだけで、さきにいきましょうよ。

を(12)

(1)③ おばあちゃん、あのひとも、だれかをまっているようよ。

⑨ だれかをおまちのようですが——。

⑩ ええ、しりあいをまっているんです。

⑬ でんわをしてみたほうがいいですよ。

⑭ でんわばんごうをかいだかみをたしかにここにいれたんですがね。

⑭ でんわばんごうをかいだかみをたしかにここにいれたんですがね。

⑯ でんわちょうをみましょうか。

②② なまえとじゅうしょをおしえてください。

⑤④ おんなのこをつれたおばあさんがとおりませんでしたか。

⑥ こんなバスケットをもって——。

⑦ ああ、あのひともおなじようなかごをもっていたね。

(2)⑨ とにかく、ここをでましょう。

ん(6)

- (1)⑩ ええ、しりあいをまっているんです。  
⑩ おじょうさん、どこへいくんですか。
- (2)⑭ でんわばんごうをかいだかみをたしかにここにいれたんですがね。  
⑭ さっきみたんですが、わかりませんでした。
- (3)⑯ それが……、わからないんですよ。
- (4)⑯ おとしたらしいんですよ。

## 資料2. シナリオ全文

題名 日本語教育映画  
「さくらが きれいだそうです」——伝聞・様態の表現——  
企画 国立国語研究所  
制作 日本シネセル株式会社  
フィルム 16m/mEK カラー・スタンダード  
巻数 全1巻  
上映時間 5分  
現像所 東映化学  
録音 読売スオジオ  
完成 昭和55年6月30日

### 制作スタッフ

制作	静 永 純 一	制作担当	佐 藤 吉 彦
脚本	前 田 直 明	演出	前 田 直 明
演出助手	田 畑 健 藏	撮影	相 良 国 康
撮影助手	渡 辺 晶	照明	伴 野 功
照明助手	中 安 和 則	音楽	鈴 木 武
録音	谷 口 幸 充 (読売スタジオ)		
ネガ編集	斎 藤 康 一		
配役	おばあさん	北 城 真紀子	
	孫	仙 道 敦 子	
	女	姉 崎 公 美 (声)	高 山 亜希子
	新宿御苑・係員 (声)	及 川 智 靖	
	同・ウェイトレス (早川プロダクション)		

カット	画 面	セ リ フ
1	メイン・タイトル 「日本語教育映画」	
2	テーマ・タイトル 「さくらが きれいだそ う で す」 ——伝聞・様態の表現——	
3	<新宿駅・西口> 新宿駅・表	
4	駅前（西口）・雑踏	
5	おばあさんと孫 おばあさんと孫娘が人を待つ ている あたりを見まわすが、時計は ない	孫「①おばあちゃん、おばさ んは、おそいわね。」 おばあさん「②いま、なんじ かしら……。」 孫「③おばあちゃん、あのひ とも、だれかをまつてい るようよ。」 おばあさん「④そうらしいね。」
6	女	孫「⑤ちょっと、きいてみま しょうよ。」
7	おばあさんと孫 二人、女性の方へ行く (三人)	おばあさん「⑥そうだね。」 おばあさん「⑦もしもし、す みませんが、いま、なん じでしょ うか。」
8	女 女、腕時計を見て	女「⑧じゅういちじはんです よ。 ⑨だれかをおまちのよう ですが——。」
9	おばあさん	おばあさん「⑩ええ、しりあ いをまつっているんです。 ⑪じゅういちじにくる

			はずなんですが……。」
10	三人 女、腕時計を見て おばあさん、袋の中をさがしながら		女「⑫もうさんじっ�んもす ぎていますね。 ⑬でんわをしてみたほう がいいですよ。」 おばあさん「⑭でんわばんご うをかいたかみをたしか にここにいれたんですが ね。 ⑮おとしたらしいんですよ。」 女「⑯でんわちょうをみまし ょうか。」 おばあさん「⑰さっきみたん ですが、わかりませんで した。
11	女		女「⑯じゃあ、ばんごうあん ないにききましたか。」 おばあさん「⑯ええ……。」 女「⑯わたしが、ききました うか。」 おばあさん「⑯おねがいしま す。」
12	おばあさん		
13	三人 三人、青電話の方へ行く		
14	青電話の前 三人		
15	女、バスケットを置く バスケット。その隣へ、おば あさんもバスケットを置く		
16	おばあさんと女		女「⑯なまえとじゅうしょを おしえてください。」 おばあさん「⑯なまえは、さ とうはな。 ⑯じゅうしょは、せたが やのほうです。」

17	女 一〇四をまわす  (おばあさんに)	女「㉕すみません。 ㉖なまえは、さとうはな。 ㉗じゅうしょは、せたが やだそうです。—— ㉘はい。—— ㉙そうですか。 ㉚そのひとのごしゅじん かむすこさんのなまえ は?」
18	おばあさん	おばあさん「㉛それが……, わからないんです……。」
19	女	女「㉜わからないそうです。 —— ㉝そうですか。 ㉞どうも……。」
20	三人 女, 受話機を置く	女「㉟だめですね。」 おばあさん「㉟どうもすみま せん。」
21	おばあさんと孫  おばあさん, 少し考える おばあさん, あいまいにうな づく	孫「㉟わたしたちだけで, さ きにいきましょうよ。」 おばあさん「㉟そうね……。」 孫「㉟きっと, あとからくる わよ。」
22	女と孫	女「㉟おじょうさん, どこへ いくんですか。」 孫「㉟しんじゅくぎょえんで す。」 女「㉟ああ, いまさくらがき れいだそうですね。」
23	三人	おばあさん「㉟そうらしいで すね。 ㉟どうも, いろいろあり

		女「 <sup>45</sup> いいえ。 がとうございました。」 <sup>46</sup> どうぞきをつけて一 一。」
		孫「 <sup>47</sup> さようなら。」 女「 <sup>48</sup> さようなら。」 おばあさん「 <sup>49</sup> さようなら ——。 <sup>50</sup> ごめんください。」
24	孫、バスケットを取り上げる。 おばあさんとともに去る <通り> タクシー乗り場 おばあさんと孫、走ってタク シーへ	孫「 <sup>47</sup> さようなら。」 女「 <sup>48</sup> さようなら。」 おばあさん「 <sup>49</sup> さようなら ——。 <sup>50</sup> ごめんください。」
25	乗りこんで、タクシー、走り 去る <青電話の前> 女 女、見送ってバスケットを持 つ。あわてて開いてみる。急 いで走り去る	おばあさん「 <sup>51</sup> おねがいしま す。 <sup>52</sup> さあ。」
26	<新宿御苑・正門> タクシー、止まる。タクシー から降りた女、門にいる係員 のところへ行く。女と係員	女「 <sup>53</sup> すみません。 <sup>54</sup> おんなのこをつれたお ばあさんがとおりません でしたか。」
27	係員	係員「 <sup>55</sup> さあ……。」
28	係員、女	女「 <sup>56</sup> こんなバスケットをも って——。」
29	係員	係員「 <sup>57</sup> ああ、そのひとは、 じっ�んくらいまえにと おりましたよ。」

30	女	女「@どちらへいきましたか。」
31	女と係員 係員、指さして	係員「@あちらのほうへいったようですよ。」 女「@どうもありがとうございます。」
32	女、走り去る <休憩所> おばあさんと孫、座っている	ウェイトレス「@おまちどおさまでした。」 ウェイトレス「@ありがとうございました。」 おばあさん「@ああ、どうも……。」
33	ウェイトレス、歩き去る 二人 一口たべて	孫「@わあ、おいしそう。 @うん、おいしい。」 おばあさん「@そう？ ・ @おいしい。」
34	一口たべて <苑内> 池のほとり	
35	女、通りがかりの二人連れにたずねている。二人、首を横に振る。女、また走って行く <休憩所> 孫とおばあさん	
36	孫、団子を食べ終わって、お茶に手をのばす 孫	おばあさん「@あつそだから、きをつけて——。」
37	孫、茶碗を持って一口飲む。 元の所に置こうとして、よそ見する。茶碗 茶碗がひっくりかえる	孫「@あっ。」

38	おばあさん おばあさん、急いでバスケットをあける	おばあさん「⑦まあ、まあ。」
39	バスケット 中からねこが顔を出す	おばあさん「⑦あっ。」
40	孫（立ってのぞきこみながら）	孫「⑧ねこ……。 ⑨どうしたのかしら。」
41	おばあさんと孫 おばあさん、少し考えている	孫「⑩さっきのでんわのところで——。」
42	おばあさんと孫	おばあさん「⑪ああ、あのひともおなじようなかごをもっていたね。 ⑫どうやら、あのひとのかごとまちがえたらしい……。」 孫「⑬きっとそうよ。 ⑭どうしましょう。」
	おばあさん、孫を連れて小走りに去る	おばあさん「⑮とにかく、こをでましょう。」
43	〈苑内の道〉 遠くに歩いているおばあさんと孫	おばあさん「⑯さっ。」
44	女、走って来る	女「⑰おばあさん。」
45	三人	孫「⑯あら。」 女「⑯やっと、みつかったわ。」
	おばあさん、バスケットを差し出す	おばあさん「⑯どうもすみません。」 女「⑯いいえ。 ⑯でも、よかったです——。」

46

女、バスケットを開ける。子  
ねこが顔を出す。一同、笑い  
タイトル  
企画 国立国語研究所  
制作 日本シネセル株式会社

孫「@びっくりしたわ。」

日本語教育映画解説20  
さくらが きれいだそうです  
——伝聞・様態の表現——

昭和58年3月

国 立 国 語 研 究 所

〒 115 東京都北区西が丘3-9-14  
電話 東京(900)3111(代表)